

# 横沢柴崎遺跡

店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2022.6

大和ハウスリアルティマネジメント株式会社  
前橋市教育委員会  
技研コンサル株式会社







# 横沢柴崎遺跡

店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2022.6

大和ハウスリアルティマネジメント株式会社  
前橋市教育委員会  
技研コンサル株式会社





遺跡周辺景観 赤城山を望む（南から）



調査区全景（上が東）



J-1号住居跡（上が北）



J-1号住居跡 全景（西から）



J-1号住居跡 主体部（北東から）



J-1号住居跡 炉と埋設土器（東から）



J-1号住居跡 張出部（東から）



J-1号住居跡 環礫状況（東から）



J-1号住居跡 埋設土器1（西から）



J-1号住居跡 埋設土器2（北から）



J-1号住居跡 ピット及び掘方（西から）

## はじめに

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる群馬県の県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、2万年前から人々が生活を始め、市内のいたる所にその息吹を感じられる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ、王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国を中心地として栄えました。また、続く律令時代になってからは総社・元総社地区に山王廃寺、国府、国分僧寺、国分尼寺など上野国の中核をなす施設が次々に造されました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎧をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東七名城の一つに数えられ、「関東の華」とも呼ばれた前橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地となり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する横沢柴崎遺跡は縄文時代の遺跡が多く確認されている赤城山南麓にあり、店舗の建設に伴い発掘調査を行いました。今回の調査では、敷石を伴う縄文時代の竪穴住居跡等が検出されました。縄文時代の竪穴住居跡で敷石の残存状況が良いものは、本市では比較的例が少なく、貴重な発見となりました。

残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、開発者である大和ハウスリアルティマネジメント株式会社をはじめ、関係機関や各方面の多大なるご配慮・ご尽力により調査事業を円滑に進めることができました。また、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

令和4年6月

前橋市教育委員会  
教育長 吉川 真由美

## 例　　言

- 1 本書は、店舗建設に伴う「横沢柴崎遺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査から報告書作成に至るまでの作業は、前橋市教育委員会の指導のもと大和ハウスリアルティマネジメント株式会社の委託を受けて技研コンサル株式会社が実施した。
- 3 発掘調査及び整理作業の体制は、下記のとおりである。

遺跡名：横沢柴崎遺跡（前橋市 0182 遺跡）　　遺跡コード：3 I 13  
所在地：群馬県前橋市横沢町 32 番　　調査面積：152 m<sup>2</sup>　　標高：約 171 m  
監理指導：並木史一（前橋市教育委員会）　　調査担当：三宅敦氣（技研コンサル株式会社）  
発掘調査期間：2022 年 3 月 1 日～3 月 25 日　　整理作業期間：2022 年 3 月 26 日～6 月 30 日

### 発掘調査及び整理作業参加者

大川明子 佐野一未 曽根 裕 松村春樹（技研コンサル株式会社）  
安藤美恵子 太田英明 太田文江 小楠和也 川野京子 木暮朱実 小鮎淳一 杉田友香 立川千恵子  
田所順子 田村洋明 平澤小夜子 細野竹美 本田勝彦 水野さかゑ 村田稔男 山口直子 六本木和幸

- 4 本書の編集は松村が行い、原稿執筆については I を並木、他を三宅が担当した。
- 5 本調査の出土遺物及び図面・写真等の資料は、一括して前橋市教育委員会で保管している。
- 6 下記の諸氏、機関にご指導・ご協力を賜りました。記して謝意を表します。（敬称略）

日沖剛史 前原 豊 山口逸弘 山下工業株式会社 環境建設株式会社

## 凡　　例

- 1 遺構図は、方位を座標北として世界測地系に基づく国家座標値を使用した。基準線数値は、標高を記した。
- 2 挿図に国土地理院発行 1/200,000 『宇都宮』『長野』、1/25,000 『前橋』『渋川』『大胡』『鼻毛石』、前橋市発行 1/2,500 都市計画図に加筆して使用した。
- 3 遺構の記号名称は、縄文時代住居跡：J、土坑：D、ピット：P、溝：Wである。
- 4 遺構図・遺物図の掲載縮尺は、次のとおりで各図中にスケール等を示した。  
全体図：1/100 遺構図：1/30、1/60 土器図：1/3、1/4 石器図：1/1、1/3、1/6
- 5 遺構・遺物の寸法等は、およそ最大計測値を記した。破損している場合は、現存値を（ ）内に示した。
- 6 挿図中に使用したトーン表示や記号については、各図中に注釈を示した。

## 目　　次

### 巻頭図版 1・2

### はじめに

### 例言・凡例・目次

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の位置と環境	2
III 調査の方針と経過	5
IV 基本層序	6
V 遺構と遺物	7
VI まとめ	21
写真図版	

## I 調査に至る経緯

令和3年6月、横沢町における店舗建設を目的とした埋蔵文化財の取扱いについて前橋市教育委員会（以下「市教委」という。）へ照会があった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「前橋市0182遺跡」内であるため、文化財保護法第93条第1項の届出を提出する必要がある旨を開発事業者である大和ハウスリアルティマネジメント株式会社（以下「開発者」という。なお、開発者名称は、発掘調査実施時のものであり、照会時の組織は大和情報サービス株式会社であった。）へ回答するとともに、当該届出の回答には確認調査を要する旨を説明した。

同年7月20日、開発者からの試掘確認調査依頼に基づき、市教委で確認調査を実施した。確認調査の結果、縄文時代の遺構を確認したため、開発者と工事計画の変更による遺跡の現状保存に向けて協議を行ったが、計画変更は困難であることから、記録保存を目的とした発掘調査を実施することで合意に至り、令和4年1月20日、開発者から最終的な工事計画で文化財保護法第93条第1項の届出が提出された。

発掘調査の実施にあたり、市教委は他の直営調査を実施中で、本開発に係る直営での調査実施は困難であるため、「群馬県内の記録保存を目的とする埋蔵文化財の発掘調査における民間調査組織導入事務取扱要綱」に則り、市教委の作成する調査仕様書に基づく監理・指導の下、民間調査組織による発掘調査とした。令和4年2月21日付けで開発者と民間調査組織である技研コンサル株式会社との間で業務委託の契約が締結されるとともに、両者に市教委を加えた三者で協定を締結し、発掘調査に着手した。

なお、遺跡名称「横沢柴崎遺跡」（遺跡コード：3I13）の「横沢」は町名、「柴崎」は旧小字名を採用した。



Fig. 1 遺跡の位置

## II 遺跡の位置と環境

### 1 地理的環境 (Fig. 2・3)

赤城山は、およそ50万年前から噴火と山体崩壊を繰り返して形成されている。その南面には、現在の山頂カルデラができる以前、58,000年前頃の大規模噴火による大胡火碎流として広い範囲に台地を造った。また、この前後の数万年をかけて、現在の渡良瀬川、粕川、荒砥川、白川などの流域では、大間々扇状地をはじめとする大きな扇状地が堆積している。ほとんどの火碎流台地や扇状台地の上には、関東ローム層と呼ばれる赤土がさらに1mほど積もっている。赤城山全体はこれらの土壌の堆積によって、なだらかに広がる放物線を描いて流麗かつ雄大な景観をみせている。山裾は旧利根川の浸食により直線的な段丘が形成され、ここより下面には、24,000年前頃に利根川が浅間火山泥流を押し出した前橋台地として一帯に堆積している。

現在、山裾ラインに沿った利根川の旧河道には、広瀬川や桃ノ木川が流れている。赤城山の南麓では、放射状に枝分かれした谷地状沖積地と、狭長にのびる丘陵状台地とが複雑に入り組んだ地形が発達している。これらは、数万年もの長い時をかけて、山麓を流れる数多くの小河川が火碎流・土石流・泥流の堆積地を浸食し続けることによってできあがった幾筋もの開析谷と開析台地が連続する姿である。

今回の調査地点は、上毛電鉄江木駅から北北東へ約1.2km、市役所大胡支所から西へ約1.8kmにあたり、前橋市横沢町32番地に所在する。大正用水から北へ約1km、主要地方道渋川・大胡線の北側の寺沢川から東へ130mほど離れて位置する。また、当地点は寺沢川東岸に細長く続く舌状台地上にあたり、寺沢川沖積地が幅約150mに対して2倍ほどの幅があり、南西に向かって緩やかに傾斜する標高約171mの畠地に立地する。当地点と寺沢川の中間には、川沿いの水田面と台地上の畠地を分ける比高約6mの崖面が続いている。

### 2 歴史的環境 (Fig. 3、Tab. 1)

本遺跡から半径約2kmの周辺地形図に「マッピングぐんま」による周知の埋蔵文化財包蔵地を重ねてみると、このあたりには台地と谷地が入り組んだ地形が続き、標高250m以上では遺跡数が極端に減少することがわかる (Fig. 3)。旧石器時代から連綿と続く集落跡・古墳・城館跡など生活の痕跡は、台地のほとんど全面に確認することができる。本遺跡の北側でも、柴崎遺跡 [37]・茂木二本松遺跡 [36]・横沢柴崎古墳群 [38]・横沢向山遺跡 [35]・横沢向田遺跡 [34]・堀越丁二本松遺跡 [33]・堀越丙二本松遺跡 [32]などが台地に沿って縦に連なっている。

旧石器時代の遺跡は、東へ1kmほどの場所に堀越甲真木B遺跡 [39] のほか、上武道路の発掘調査のように新たに珠数つなぎでみつかっていることから、未だに埋もれている遺跡が数多くあると思われる。

縄文時代になると、周辺遺跡からも草創期・早期の土器がみつかっている。前期・中期ともに20以上の遺跡から住居跡が検出され非常に増大している。芳賀東部団地遺跡 [3]・川白田遺跡 [4]・横沢新屋敷遺跡 [27]・五代伊勢宮遺跡 [6]・堀越並木遺跡 [30]・上ノ山遺跡 [46]の大規模集落を代表として数多くの遺跡が確認されている。後期には極端に減少するものの、この周辺でも5遺跡から集落跡がみつかっている。

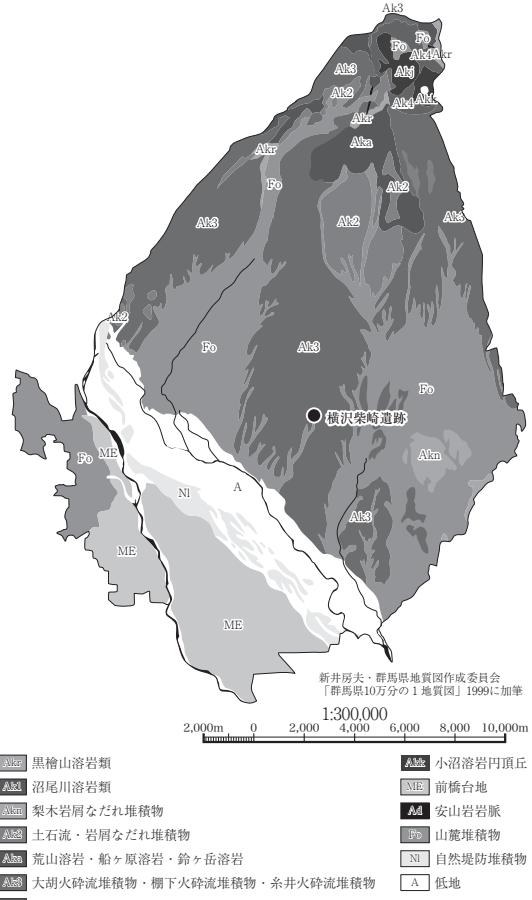


Fig. 2 前橋の地質

縄文晩期から続く弥生時代では、この周辺には遺跡がほとんど確認できず、赤城山麓以下の低地部に生活域が移動したものと考えられる。その後、このあたりでは、昭和10年「上毛古墳総覧」において約190基もの古墳が確認されていたが、平成29年「群馬県古墳総覧」をみると正円寺古墳〔20〕をはじめ新田塚古墳〔15〕・堀越古墳〔53〕など著名古墳を含めて18基しか現存していない。

古墳時代から奈良・平安時代の遺跡は、芳賀東部団地遺跡群〔3〕・五代木福遺跡〔7〕・檜峯遺跡〔12〕・荻窪倉兼遺跡〔13〕・亀泉西久保Ⅱ遺跡〔18〕・富田漆田遺跡〔26〕など巨大な集落跡がみつかっている。

中近世では、城館跡を代表する大胡城跡〔54の東〕女堀のスタート付近にあたる石関西田遺跡〔19〕寺院跡の天神風呂遺跡〔43〕のほか、茂木古墓跡〔45〕や備蓄錢の遺跡などがあげられる。

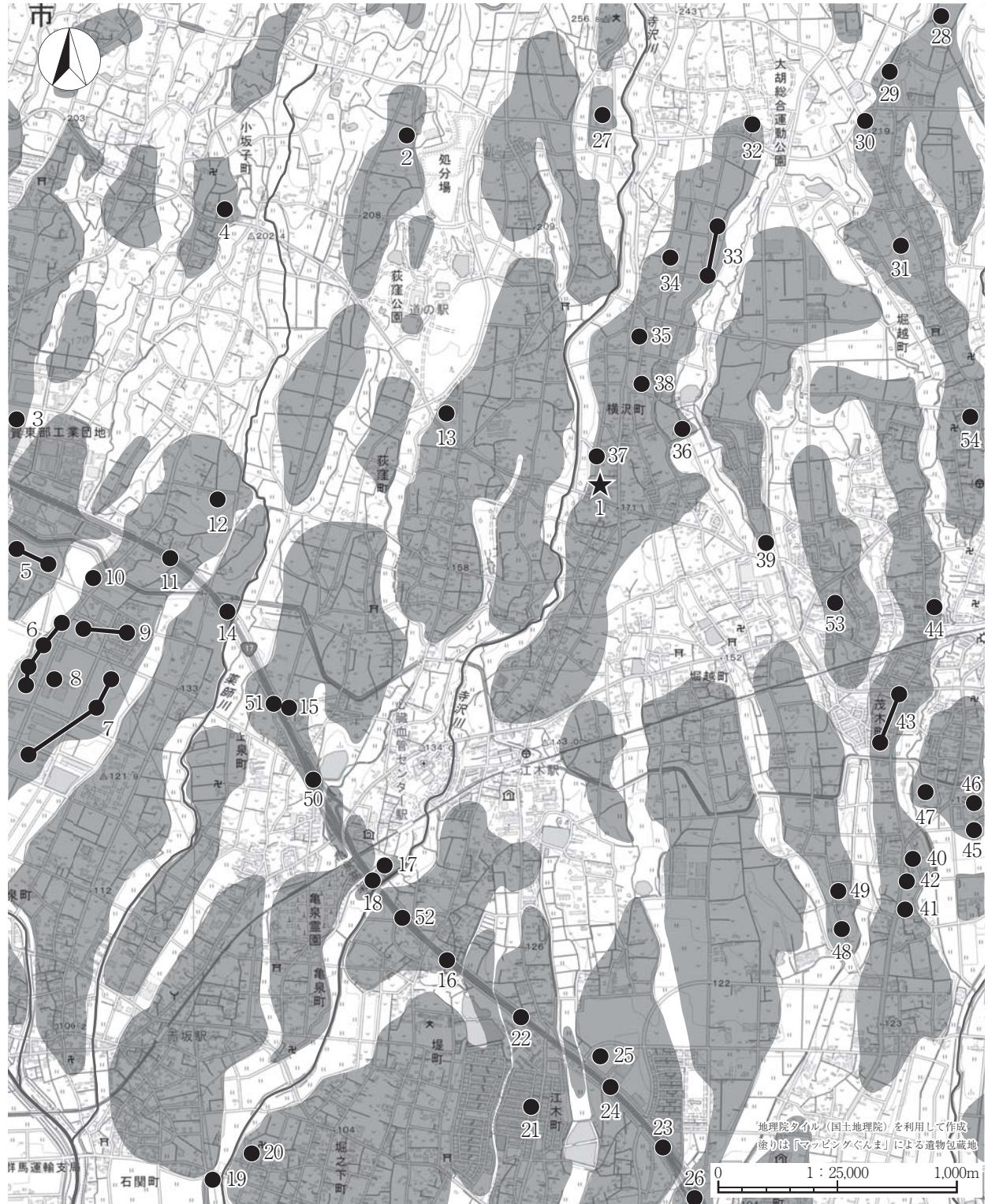


Fig.3 周辺遺跡図

Tab. 1 周辺遺跡一覧表

No	遺跡名	前橋市 遺跡番号	旧石器					縄文			古墳		奈良 平安	中近	特記	文献
			I	II	III	IV	V	草創・早	前	中	後	住居他	墳墓			
1 横沢柴崎遺跡	0182					○			住2	○					敷石	本報告書
2 小坂子一本峯遺跡	0030					○	○	○	住1			住9				60、63
3 芳賀東部閉地遺跡群	0051					○	住51	住3	住5	住75	4基	住425	館・製鉄	敷石・土坑群	6、10、13、28、29、59	
4 川白田遺跡	0052					○	住22	○	○					井戸他	畠	32
5 五代中原遺跡	0053						住7			住85		住19	館			50、54、56
6 五代伊勢宮遺跡	0055							住8	住41	○	住80		住71	溝他	土坑群	43、49、50、53、54、70、75、85
7 五代木福遺跡	0055						住1	住1	○	住107		住177	溝他	敷石・鍛冶	43、44、55、58	
8 五代竹花遺跡	0055						○	住3	○	住9		住26	道他	備蓄錢	43、55	
9 五代深堀遺跡	0055						○	住10		住13		住44	溝他	土坑群	44、50、58、82	
10 五代山街道遺跡	0055						住3	住6		住1		住2	溝他	敷石	56	
11 五代砂留遺跡群	0055	○ ○	○	○		○	住3	○	○	住8		住16	水田他	鍛冶・道	80、81	
12 榎峯遺跡	0055									住11		住65		三彩	4	
13 萩窪倉兼遺跡	0060						○					住65				47
14 上泉武田遺跡	0074	○ ○	○				○	○	○			住22	館	製鉄	79、81	
15 新田塚古墳	0076										1基					84
16 堀沼上遺跡	0079	○		○			○	○		住6		住34	水田	灌漑	71、76	
17 龜泉薬師塚古墳	0080										1基					84
18 龜泉西久保Ⅱ遺跡	0098					○	○	○	○	○		住63	溝他	水田		73
19 石関西田遺跡(女堀)	0100												女堀・水田			69、70、83
20 正円寺古墳	0101										1基					84
21 萱野遺跡	0104						○	住2		住47	1基	住30				14
22 萱野Ⅱ遺跡	0104	○ ○ ○ ○	○			住11	住4			○	2基	住10		印		67、76
23 富田下大日遺跡	0105	○		○			住4	住9		住6	1基	住30	溝・道			61、74
24 江木下大日遺跡	0105	○				○	住3	○	○	住5		住50		鍛冶		62、74
25 富田下大日Ⅲ遺跡	0105						住4	住1				住10				40
26 富田漆田遺跡	0106	○				○	○	住1		住7		住63	館他	窯		61、74
27 横沢新屋敷遺跡	0174			○	○	住26	○	○			4基	○	古墓	廃社		26
28 甲諭訪遺跡	0180							住7								8
29 堀越西一丁田遺跡	0180					○	○	○	住2				道他			33
30 堀越並木遺跡	0180					○	住25	住5						敷石・捨場		57、64
31 堀越中道遺跡	0180					住17	住1	○	住4		住39	墓・道	印・鍋			27
32 堀越丙二本松遺跡	0182						住3				2基					24
33 堀越丁二本松遺跡	0182		○	○		住8	住1				住11	○	鍛冶			34
34 横沢向田遺跡	0182					住1					2基	住1				34
35 横沢向山遺跡	0182					住4					2基	住1	○			34
36 茂木二本松遺跡	0182					住1	○				○		地割			34
37 柴崎遺跡	0182						○		○				溝	環頭大刀		20
38 横沢柴崎古墳群	0182										2基					84
39 堀越甲真木B遺跡	0190	○				住-						○				86
40 小林遺跡	0191					○	○	住6		住7		住5	溝			18
41 山神遺跡	0191					○	○	住2		住6		住2	溝			18
42 茂木山神Ⅱ遺跡	0191						○	住12	○	住11		住21		墨書き		45
43 天神風呂遺跡	0191					住2			住13		住31	溝他	寺院他		3、66、87、88	
44 天神遺跡	0191		○			○	住2	住2	○	住11	○				9、12	
45 茂木古墓跡	0198											古墓				2
46 上ノ山遺跡	0198		○				住58	○	住7	7基	○	屋敷	敷石			17
47 西小路遺跡	0198		○				住13			5基	○	墓	敷石			19
48 稲荷窪遺跡A地点	0203					○	○	住3		住1	2基	住1				23
49 稲荷窪遺跡B地点	0203					住2	住1		住18		住1	溝				35
50 上泉唐ノ堀遺跡	0543	○ ○	○	○	○	住17	○	○			住15	道他			76、77、78、81	
51 上泉新田塚遺跡群	0543	○ ○ ○ ○				住11			住1	2基	住4	道他			78、81	
52 亀泉坂上遺跡	0781	○	○	○		住6	○	○	住21	1基	○	道・畠			72、76	
53 堀越古墳	0916									1基						84
54 養林寺裏遺跡	0180										住4	館他	大胡城の西隣	1、2、11、52		

※ I～Vは赤城山南麓の旧石器群の5時期変遷(I～III：ナイフ形石器文化期、IV：槍先形尖頭器文化期、V：細石刃文化期)。住は住居跡検出、数値は軒数、○は遺物出土を示す。文献番号は26頁を参照。

### III 調査の方針と経過

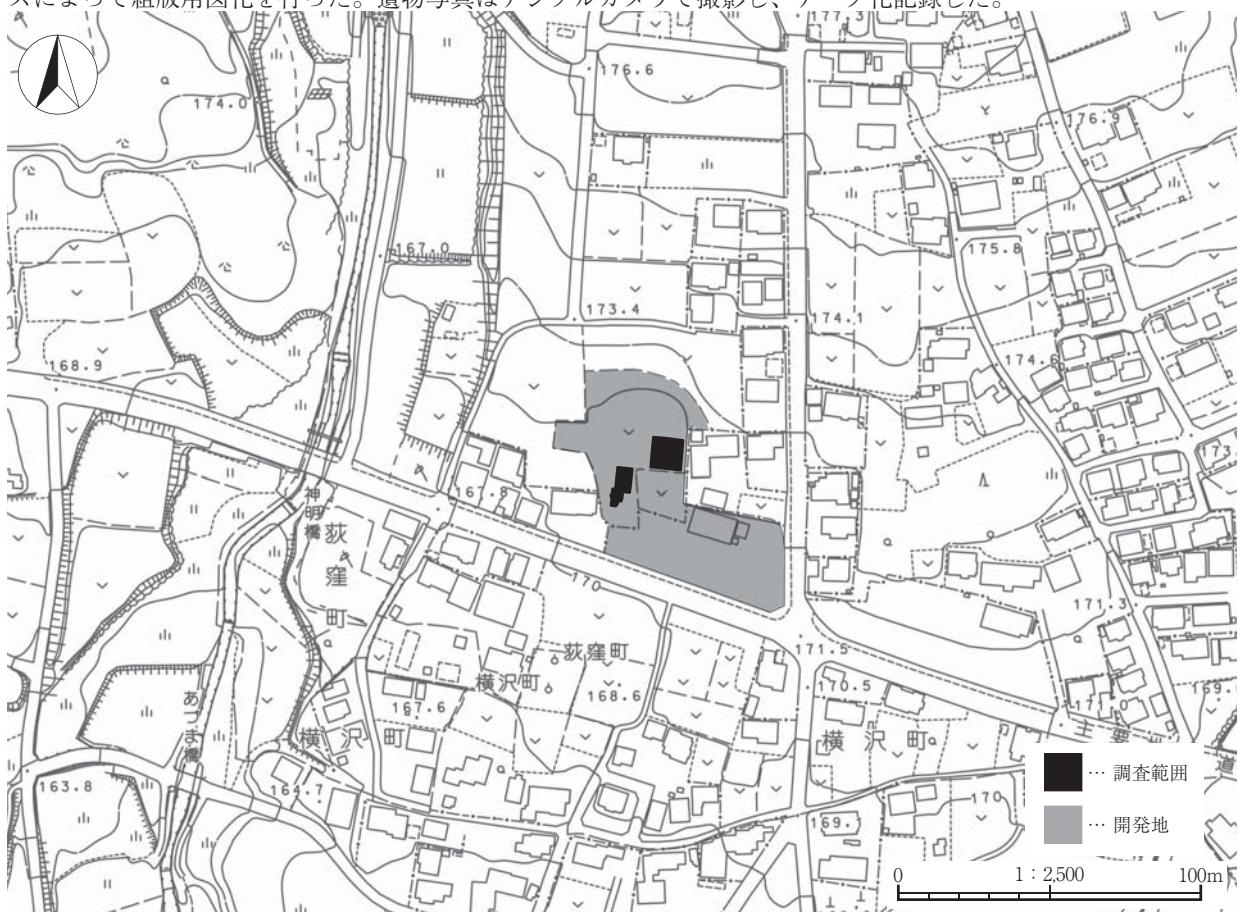
#### 1 調査範囲と基本方針 (Fig. 4・5)

委託調査箇所は、大和ハウスリアルティマネジメント株式会社による店舗建設予定地のうち、前橋市教育委員会による試掘調査結果に基づき、遺構・遺物が確認された2箇所について、当初調査面積140m<sup>2</sup>の範囲であった。

東区は10m方形の区域内に縄文時代遺物包含層があるとされたため、20～50cmの表土層を0.25m<sup>3</sup>バックホーで掘削し、遺物包含層を人力により掘り下げて調査を行った。また、全面に2mグリッドを設定した。北西隅を起点に順次東へ1・2・3・4・5グリッドとし、西へ折り返して順次南へ下がり、南東隅の25グリッドまでと呼称した。出土遺物は、グリッド単位で掘り下げと取り上げ調査を進めた。包含層下から石匂炉が検出され、その周囲に調査区半分弱の半円形プランが確認されたことからJ-2号住居跡と認定した。そのため整理作業では、住居跡の直上にあたる17・18・19・20・21・22・23・24・25グリッドから出土した多量の遺物は、包含層としてではなく住居跡の覆土遺物に変更して取り扱った。西区では、8×5mの区域を0.25m<sup>3</sup>バックホーにより表土を掘削したところ、想定されたピットと溝以外に敷石住居跡の一部が確認されたため、住居遺構の範囲を人力により約12m<sup>2</sup>拡張して調査を進めた。その後、確認された各遺構を移植コテ等で精査し、測量・写真の記録を行った。調査終了後、0.5m<sup>3</sup>バックホー及び振動ローラーを使用して埋め戻し・転圧を行い復旧した。

図面作成は、トータルステーション・電子平板を用いて、また、オルソソフトを用いた図化も併用して測量・編集した。写真記録は、35mm判のモノクロとリバーサルフィルム及びデジタルカメラの3種類を使用して撮影し、調査区全景撮影はドローンによりデジタル撮影を行った。

整理作業のうち、土器の断面はキーエンス社製3Dスキャナーで作図し、土器の一部と石器はデジタルトレースによって組版用図化を行った。遺物写真はデジタルカメラで撮影し、データ化記録した。



## 2 調査経過

令和4年3月1日、調査区全体の整備及び調査準備を行い、東側調査区域を重機により表土掘削を開始。2日に、東西両調査区域の表土を掘削した。

試掘調査によって、東区の南側では縄文時代の包蔵地があらかじめ確認されており、表土掘削時には縄文土器等が多量に出土したため、当初から2mグリッドを組みグリッドごとに遺物を取り上げながら順次調査を進めた。東区の北東から1号溝を確認し調査を行った。4日までには、西区においてD-1～5号土坑及びW-2号溝等のプランを確認した。その後、W-2号溝の下からD-6～8号土坑を検出し、調査を進めた。

4日に南西端から敷石遺構の一部が発見されたため、7日に前橋市教育委員会文化財保護課と協議を行い、人力により調査区を拡張しJ-1号住居跡として調査を続行することになった。8・9日に拡張区において敷石住居跡の全体を検出し、14日にドローンによる空中撮影を予定し、11日までに敷石住居跡を含めて遺跡全体の精査を進めた。

東区からは、多量の遺物とともに焼礫等による集石遺構及びD-9号土坑の調査を行った。さらに、14日に石囲炉が確認され、周囲を精査したところ調査区域外まで広がる住居跡が検出されたため、住居跡プランを線引きして空中写真を撮影した。撮影後、グリッド調査を切り替えJ-2号住居跡として調査を行った。J-1号住居跡は、16日までに敷石上面の記録を終え、敷石をはがして柱穴や埋設土器の調査を進めた。J-2号住居跡は、炉体土器や周囲の柱穴、さらに、住居跡と重複するD-10・11号土坑の調査を進めた。

15・17日に前橋市教育委員会文化財保護課の完了検査を受けたが、天候が悪く両住居跡の残務処理が23日まで継続された。23・24日に器材等を撤去・搬出し、25日に重機により埋め戻して発掘調査を終了した。

整理等作業は、3月28日から開始し、4～5月に検出遺構の図面・写真を整理、出土遺物の分類・実測・撮影を実施した。並行して執筆・編集を行い、6月30日に報告書を発行した。

## IV 基本層序

大胡火碎流台地では、通常黒土層の下には関東ローム層が厚く堆積している。I層の表土は、非常に粗い砂で軽石を混在する。II層は黒褐色の砂質土層であり、I層とIII層との間にII層がなく、洪水による氾濫褐色砂層や鉄分の沈着がみられる場所もある。III層とIV層の黒土層は、縄文時代の遺物包含層であるが、平面・断面とも土層中の遺構確認はかなり難しい。V層は、ローム漸移層で、VI層中とVII層中の軽石は、それぞれ浅間山の板鼻黄色軽石と板鼻褐色軽石であると考えられる。

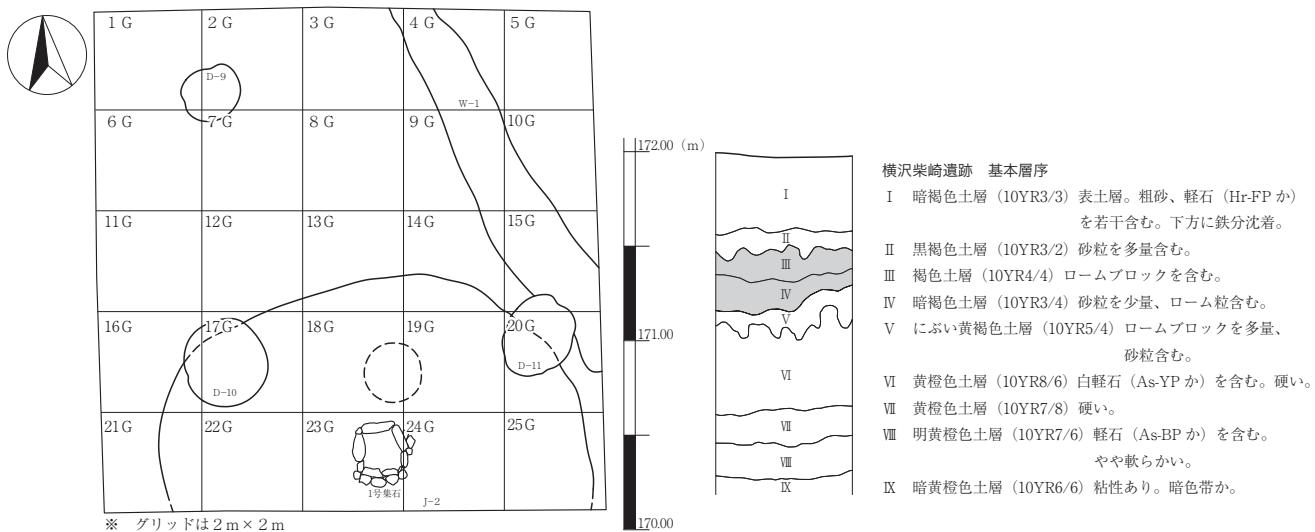


Fig.5 東区グリッド分割図 (S = 1/150)

Fig.6 基本層序 (S = 1/40)

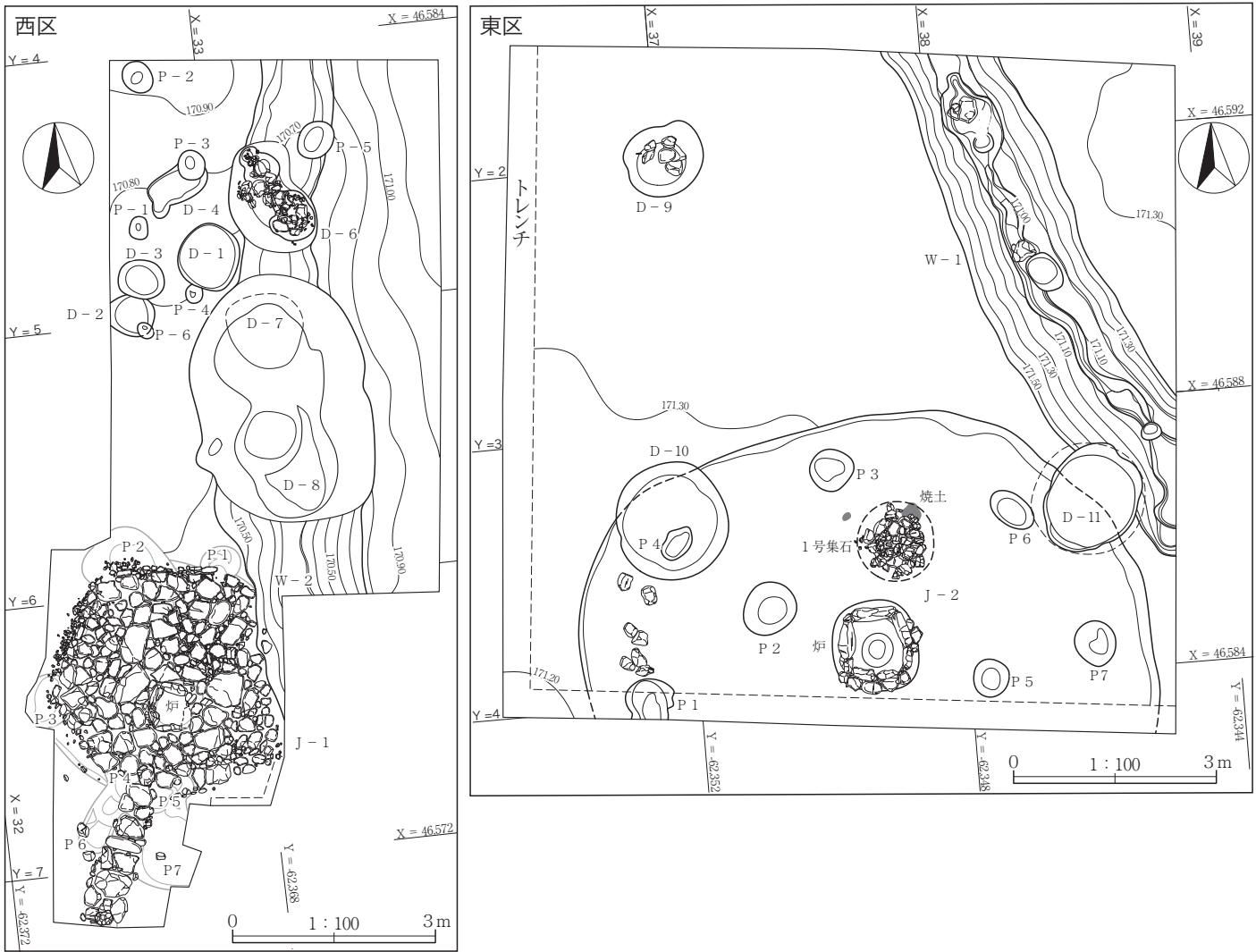


Fig. 7 全体図

## V 遺構と遺物

### 1 全体の概要 (Fig. 7)

検出された遺構は、縄文時代中期の敷石住居跡 (J-1) 1軒、竪穴住居跡 (J-2) 1軒、土坑7基、集石遺構1基及び時期不明の土坑3基、溝2条、ピット6基である。出土した遺物は、旧石器時代の細石刃核1点、縄文時代前期～後期前半の土器片と石器であり、縄文時代中期後半の土器片が圧倒的な数を占めている。

### 2 縄文時代住居跡

#### J-1号住居跡 (Fig. 8、巻頭図版1・2)

位置 X 32・33、Y 5～7 主軸方向 N - 26° - E 形状 柄鏡形、六角形、全面石敷。 規模 南北 5.55 m、東西 3.65 m。 面積 (10.55) m<sup>2</sup> 敷石面 左右非対称のフラット敷、全体の半数以上は輝石安山岩の割石で約1/3は円礫、最大は 55 × 55cm、炉の奥部は小礫を丁寧に間詰、敷石周縁部に中礫を並べる。 張出 長さ 2.2 m 幅 0.7 m、ほぼ中央に全面磨りの石英閃緑岩の框石（かまちいし） 56 × 28cm を置く、框石の南は 8 cm 段下がありその先は緩傾斜、框石西に自然礫を立てる。 重複 W-2 と重複。新旧関係は本遺構→W-2。 炉 石 囲外側 75 × 68cm 石内側 47 × 46cm 敷石からの深さ 40cm、東の炉石は抜け（攪乱）、炉石の内側を破碎、炉内部はきれいに清掃、掘方 77 × 75 × 38cm。 埋設土器 張出の連結部と先端部に2基、1は口縁部から底部まで張出連結部にありピット径 50cm 深さ 35cm で対ピットと重複、2は上半部を欠損し底部まで張出先端部にあ

りピット径 42cm 深さ 20cm、1・2とも建柱後に正位埋設してから石敷。 還礫 北西から西壁に沿って幅約 15cm の範囲に小礫が散らばる。敷石面から約 10cm 浮く、また西側の敷石面上に礫 8 石を置く。 柱穴 柱穴掘削→建柱→石敷の順、六角形の各頂点の P 1～P 3 は主柱、埋設土器 1 脇の P 4・5 は対ピット、框石東西の P 6・7 は入口ピット、P 4～P 7 は U 字状につながる、P 1：63×58×46cm、P 2：(170×110×84cm、別土坑か)、P 3：80×65×46cm、P 4：(75×60×58cm、P 5、埋設土器 1 と重複)、P 5：(80×75×44cm、P 4、埋設土器 1 と重複)、P 6：(120×不明×59cm、別土坑か)、P 7：(60)×47×65cm。 出土遺物 埋設土器 1・2、敷石の間詰として土器片と石器を数点利用 (3・4・21)、環礫の下に石棒・石皿片 (22・23・24)、ほとんど敷石面から浮いた状態で出土、土器 655 点、14,914 g (中期後半 95% うちほとんど加曾利 E IV 式)、石器 74 点 (うち製品 31%)。 時期 加曾利 E IV 期。

### J-2号住居跡 (Fig. 9、PL. 1)

位置 X 36～38、Y 3・4 形状 楕円形、南半は調査区外、プラン不明瞭。 規模 南北 (4.65) m、東西 8.55 m。 面積 (32.47) m<sup>2</sup> 床面 フラットで硬化面なし、北側に焼土あり。 重複 D-10・11、1号集石と重複。本遺構→D-10・11→1号集石。 炉 石囲外側 128×122cm 石囲内側 72×71cm 深さ 27cm、北縁に長さ 66cm の石を横位に立て南縁は石を 2 列に並べる、炉中央に 51×46×14cm の穴を掘り胴上部のみの炉体土器を埋設、灰等はきれいに清掃、炉穴 137×124×36cm。 柱穴 8 本主柱穴 (うち P 1・P 3・P 4・P 6・P 7)、P 1：(60)×56×46cm、P 2：78×79×38cm、P 3：62×65×42cm、P 4：58×37×48cm、P 5：56×52×54cm、P 6：73×44×24cm、P 7：67×61×44cm。 出土遺物 炉体土器 (1) は被熱で口縁部脆い、炉石の一部に凹石や多孔石 (30・31・36) 利用、遺物包含層中の 17～25 グリッド出土遺物を J-2 覆土遺物とする、土器 3,902 点、62,593 g (中期後半 90% うちほとんど加曾利 E III 式)、石器 373 点 (うち製品 29%)。 時期 加曾利 E III 期。

### 3 土坑・集石遺構・ピット・溝 (Fig.10・11、PL. 1・2)

Tab. 2 土坑・集積遺構・ピット・溝計測表 (D-5 は欠番)

遺構名	位置	長軸×短軸×深さ (cm)	平面形状	断面形状	出土土器	出土石器	重複	備考
D-1	X 32・33、Y 4	94×90×95	円形	深いフラスコ状	18 点、439 g 中期前半 83%	7 点、製品 14%	P-4 より古	
D-2	X 32、Y 4・5	68×60×16	円形	浅い台形状	24 点、784 g 中期前半 100%	1 点	D-3、P-6 より古	
D-3	X 32、Y 4	68×57×23	楕円形	浅い弧状	1 点、45 g	1 点	D-2 より新	
D-4	X 32、Y 4	92×52×22	長円形	浅い台形状	49 点、905 g 中期前半 61%	-	P-3 より古	上面に遺物集中
D-6	X 33、Y 4	(171×128×34)	二つの円形	浅い渦巻弧状	84 点、3,048 g 中期後半 94%	55 点、製品 25%	-	W-2 の窓穴、遺物は摩滅、底に砂礫層
D-7	X 32・33、Y 4・5	(269×228×136)	円形	深いフラスコ状	436 点、1,411 g 中期後半 96%	54 点、製品 30%	D-8 より新	W-2 の窓穴、遺物は摩滅、底に砂礫層
D-8	X 32・33、Y 5	(273×212×92)	円形	深い渦巻階段状	36 点、1,517 g 中期後半 97%	5 点、製品 80%	D-7 より古	W-2 の窓穴、遺物は摩滅、底に砂礫層
D-9	X 36・37、Y 1・2	121×108×84	円形	深い台形	52 点、2,277 g 中期後半 88%	10 点、製品 50%	-	20～30cm 大の礫 7
D-10	X 36・37、Y 3	174×163×38	円形	浅い弧状	239 点、5,981 g 中期後半 96%	19 点、製品 32%	J-2 より新	遺物多量
D-11	X 38、Y 3	167×136×120	楕円形	深いフラスコ状	19 点、806 g 中期後半 63%	3 点、製品 33%	J-2 より新	
集石遺構	X 37、Y 3	(118×114×22)	円形	浅い弧状	54 点、1,040 g 中期後半 66%	9 点、製品 89%	J-2 より新	
ピット		P-1 : X 32、Y 4。33×27×47cm。平面楕円形、断面 U 字状。 P-2 : X 32、Y 4。49×41×44cm。平面楕円形、断面台形状。 P-3 : X 32、Y 4。44×40×79cm。平面円形、断面深い U 字形。 D-4 より新。 P-4 : X 32、Y 4。30×25×60cm。平面円形、断面深い台形状。 D-1 より新。 P-5 : X 33、Y 4。58×49×68cm。平面楕円形、断面深い台形状、W-2 より新。 P-6 : X 32、Y 5。26×21×66cm。平面円形、断面深い U 字形。 D-2 より新。						
W-1		位置 X 37・38、Y 1～3。 状況 北と東は調査区外へ、緩やかに蛇行しながら南流、勾配 3.2%。 主軸方向 N-18°～32°-W。 規模 長さ (973) cm、上幅 174～142cm、下幅 63～37cm、下溝幅 78～15cm、深さ 46cm。 形状 断面三角形状、底部に下溝が抉られ砂礫と遺物が堆積、大きさ 30～60cm 深さ 10～30cm の円形ピットが 3 孔あり砂礫と遺物が詰まっていることから洪水時にできた窓穴と考えられる。 重複 D-11 号土坑より新。 出土遺物 繩文土器片 398 点、石器 77 点。ほとんどは中期後半で称名寺式が数点。 時期 覆土中に Hr-FP と思われる輕石がみられるが時期不明。						
W-2		位置 X 32・33、Y 4～6。 状況 北と南は調査区外へ、緩やかに蛇行しながら南流、勾配 7.3%。 主軸方向 N-3°～12°-E。 規模 長さ (825) cm、上幅 215～103cm、下幅 63～29cm、深さ 32～47cm (土坑底部まで 159cm)。 形状 断面弧状、溝のほぼ中央に並ぶ D-6～8 号土坑は本溝の洪水時の窓穴と考えられ、底部が渦を巻くように抉られ、摩滅した遺物を含む氾濫堆積物が充填。 重複 J-1 号住居跡より新。 出土遺物 繩文土器片 339 点、石器 25 点 (D-6～8 号土坑と合算: 土器 895 点、石器 139 点)、中期後半を主体に中期中葉もみられるが土坑から称名寺式も出土。 時期 不明。						

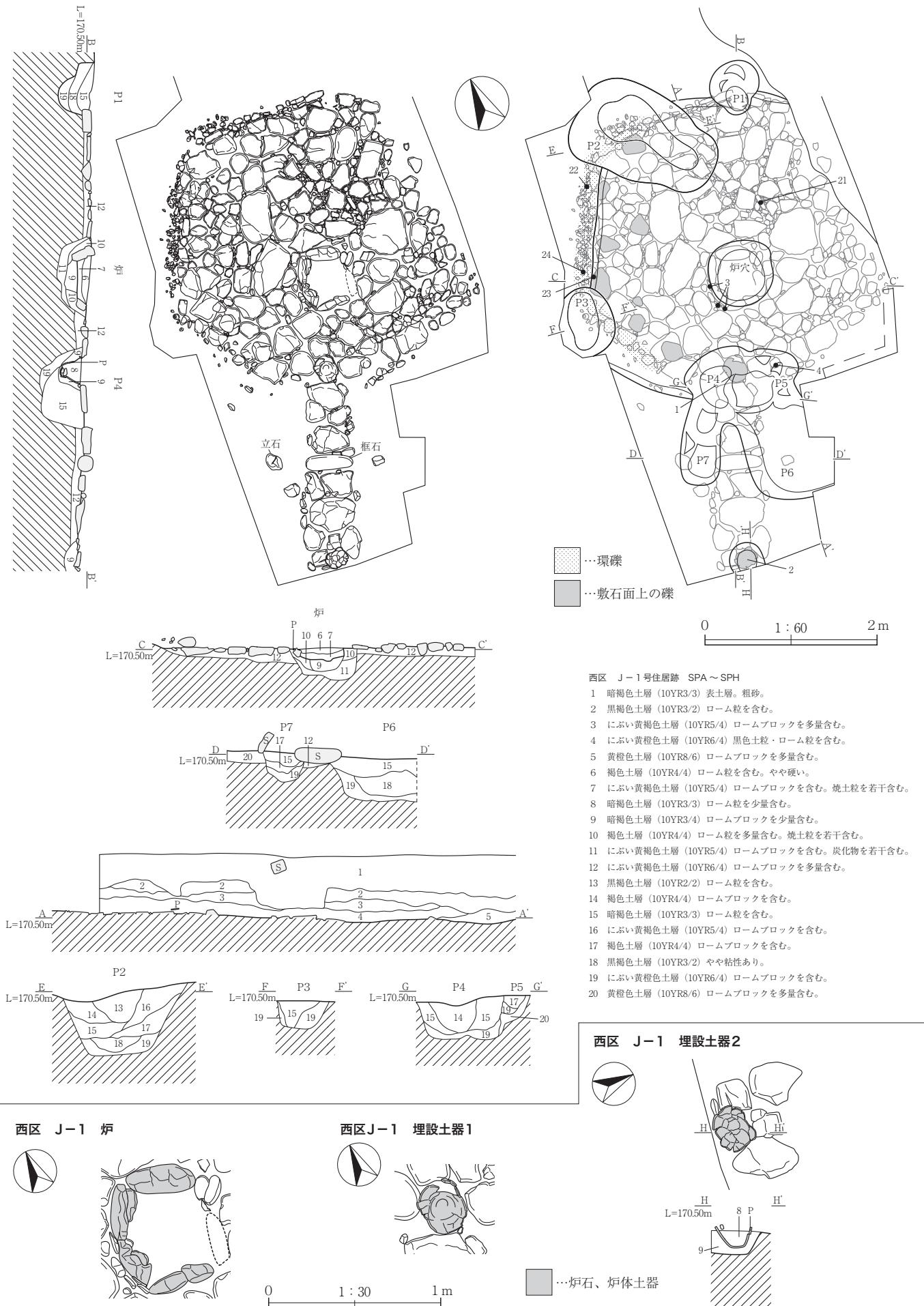
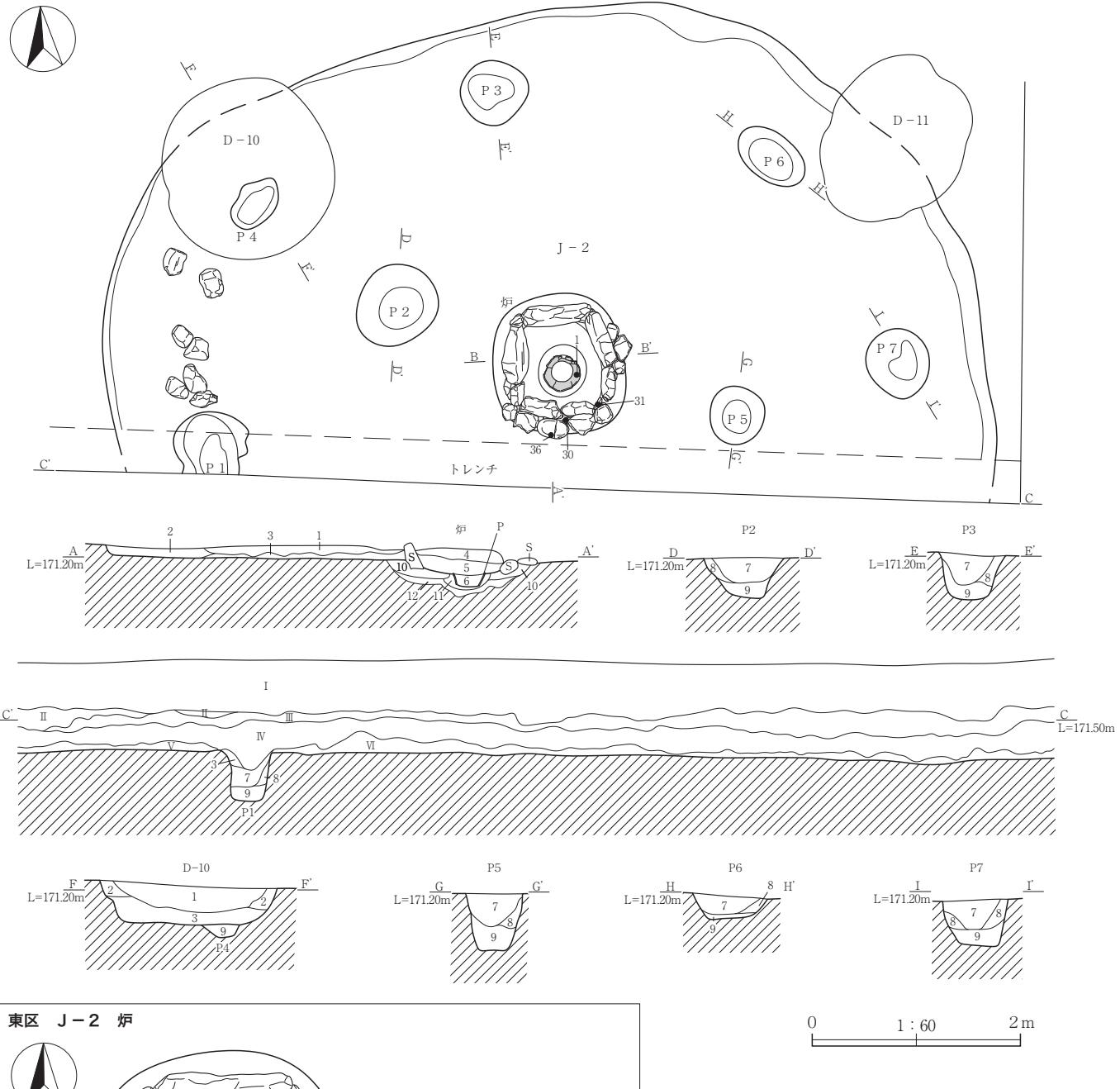


Fig. 8 J-1号住居跡

東区 J-2



東区 J-2 炉

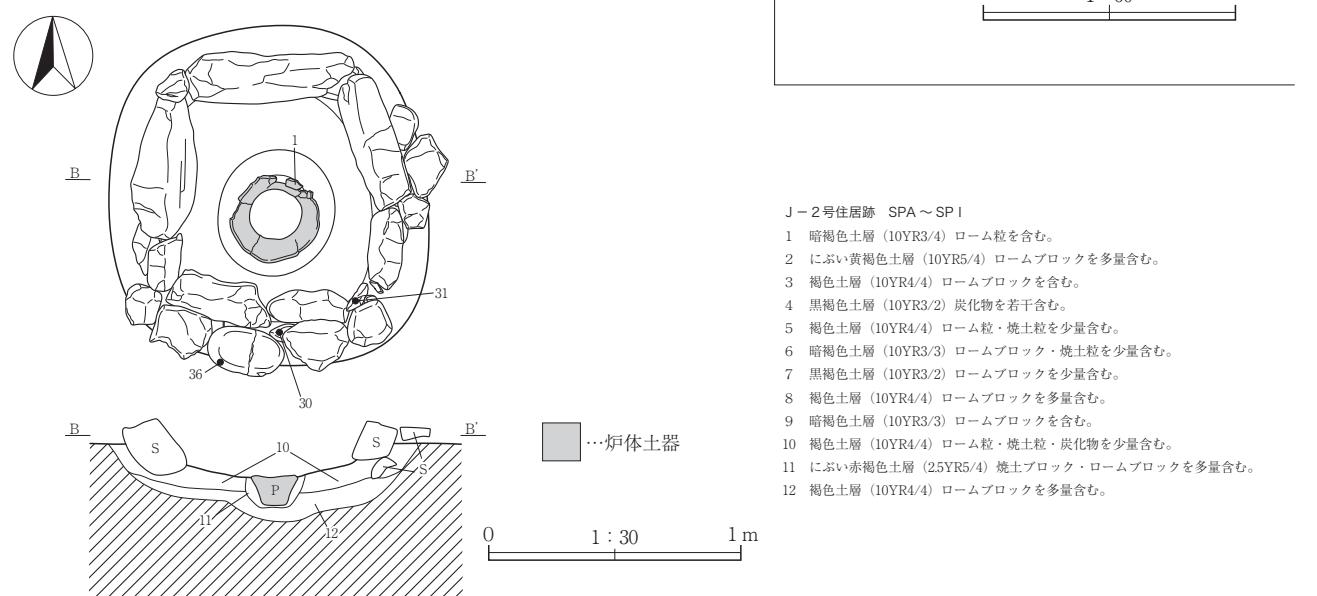


Fig. 9 J-2号住居跡

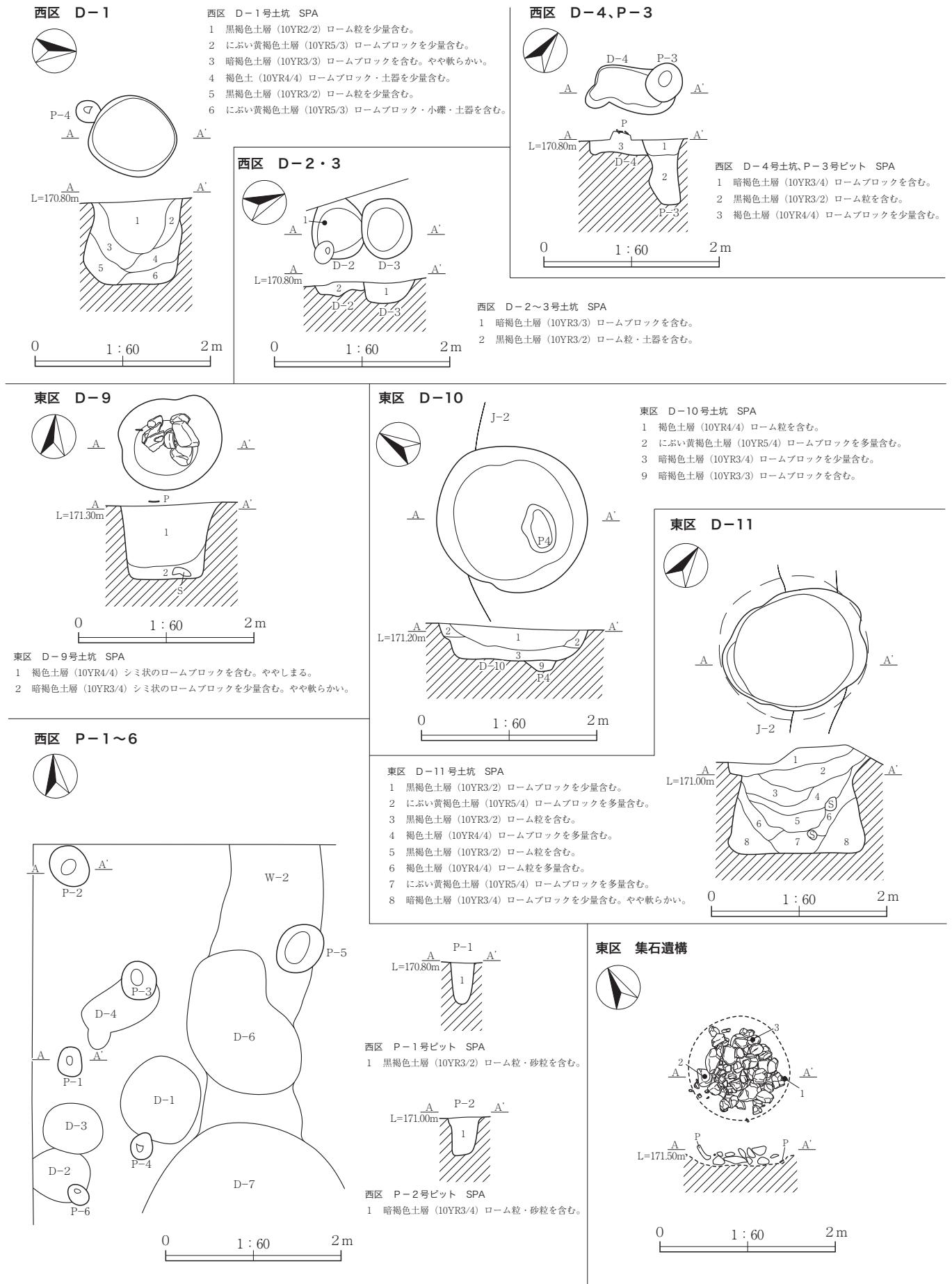
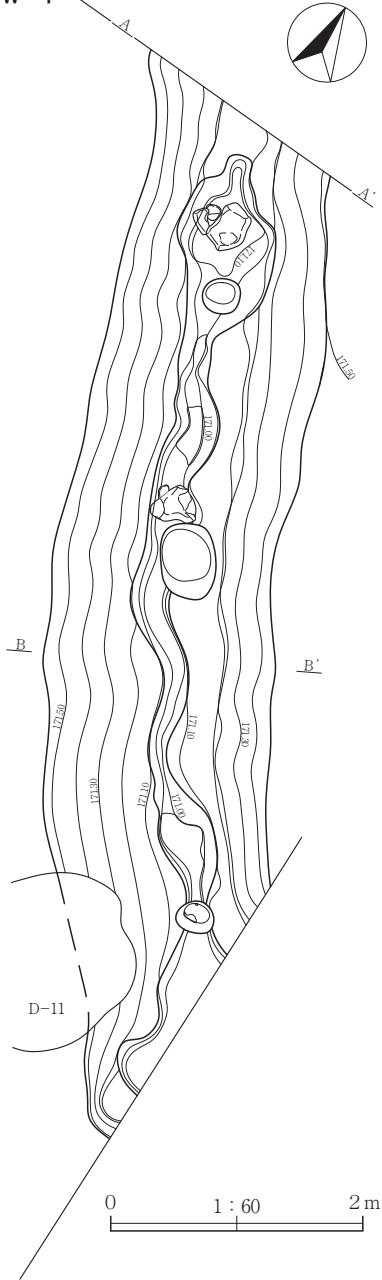
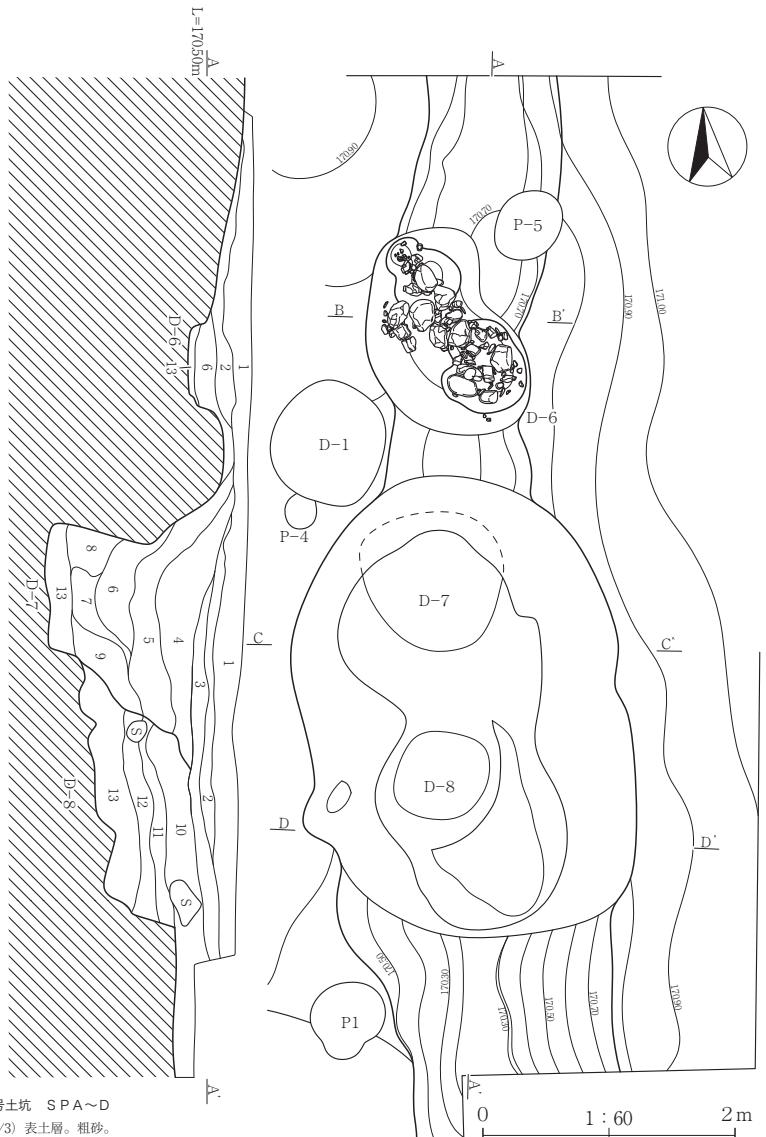


Fig.10 D-1～4・9～11号土坑、P-1～6号ピット、集石遺構

東区 W-1



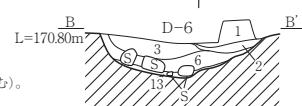
西区 W-2



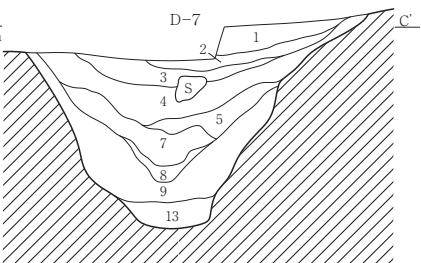
W-2号溝、D-6～8号土坑 SPA～D

- 1 暗褐色土層 (10YR3/3) 表土層。粗砂。
- 2 褐灰色砂層 (10YR5/1) 洪水層か。
- 3 黒褐色土層 (10YR3/2) 砂粒を多量含む。
- 4 にぶい黄褐色土層 (10YR5/3) ロームブロックを少量含む。
- 5 褐色土層 (10YR4/4) ロームブロックを含む。
- 6 にぶい黄褐色土層 (10YR5/4) ロームブロックを多量含む。
- 7 黒褐色土層 (10YR3/2) ロームブロックを少量含む。
- 8 暗褐色土層 (10YR3/4) 砂粒・小礫・ロームブロックを少量含む。
- 9 にぶい黄褐色土層 (10YR5/4) ロームブロックを多量含む。
- 10 褐色土層 (10YR4/4) ロームブロックを少量含む。
- 11 黒褐色土層 (10YR2/2) ローム粒を少量含む。
- 12 にぶい黄褐色土層 (10YR5/4) ロームブロックを多量含む。
- 13 褐灰色砂礫層 (10YR4/1) 洪水堆積土層 (摩耗した縄文土器等含む)。

D-6・7・8はW-2の竪穴。



L=170.80m

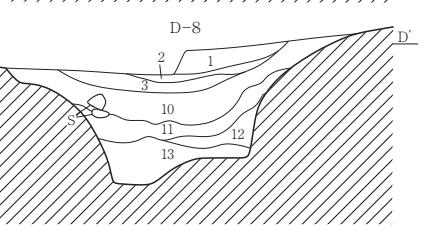


C

L=170.80m

D

L=170.80m

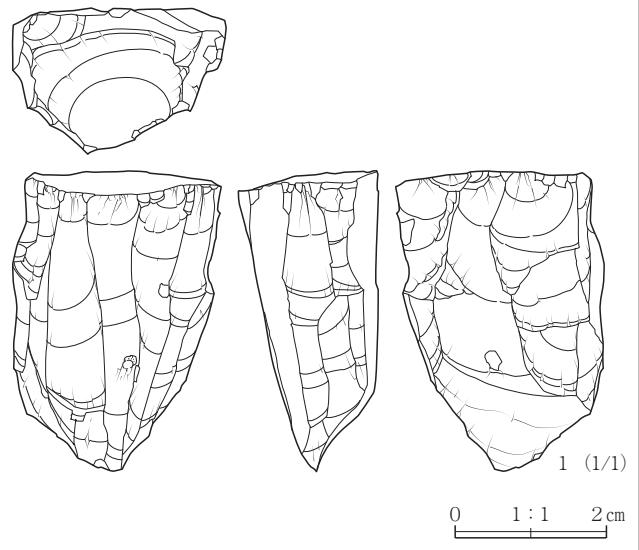


W-1号溝 SPA・B

- 1 暗褐色土層 (10YR3/3) 表土層。粗砂。
- 2 褐灰色砂層 (10YR5/1) 洪水層か。
- 3 黒褐色土層 (10YR3/2) 砂粒を多量含む。
- 4 にぶい黄褐色土層 (10YR6/4) ローム土を多く含む。Hr-FPを微量含む。
- 5 暗褐色土層 (10YR3/3) ロームブロックを含む。溝底部の一部に褐灰色砂礫層あり、竪穴状ビットが出来ている (摩耗した縄文土器等含む)。

Fig.11 W-1・2号溝、D-6～8号土坑

旧石器



J - 1

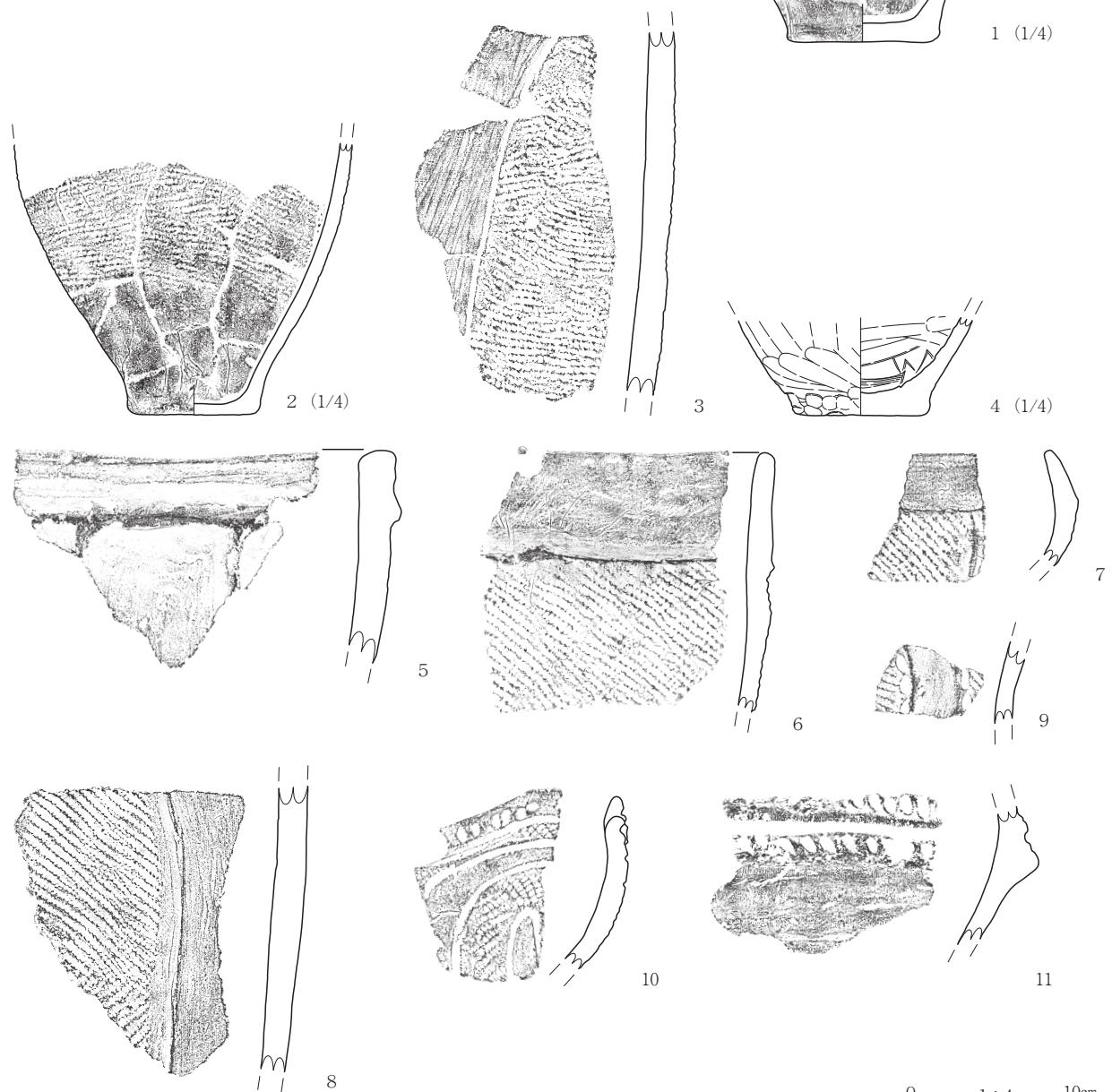
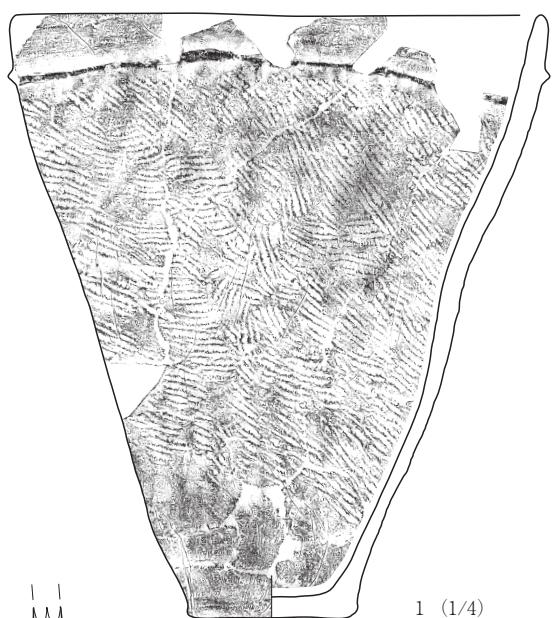
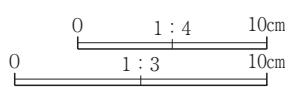
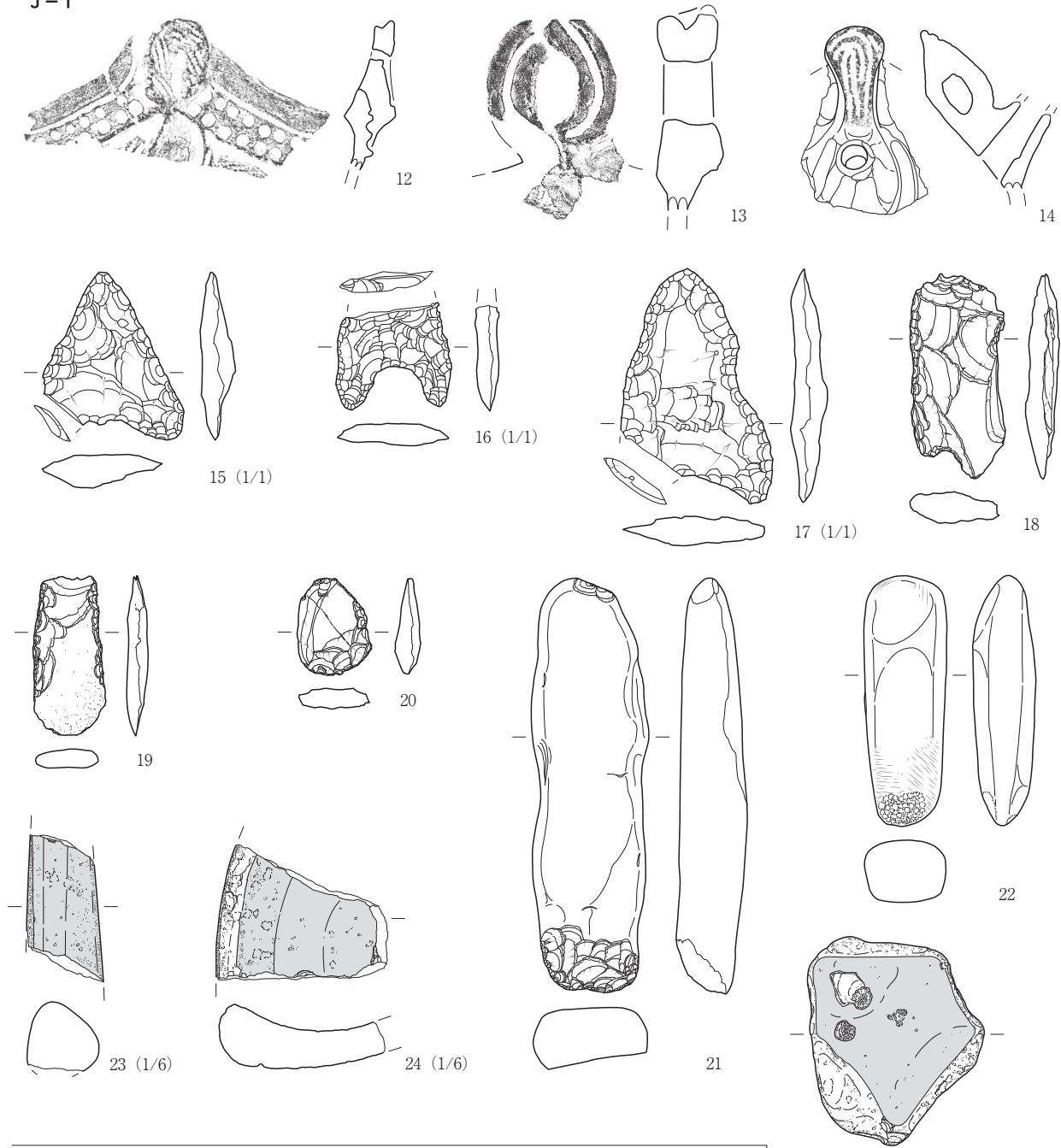


Fig.12 旧石器、J - 1号住居跡出土遺物



J - 1



J - 2

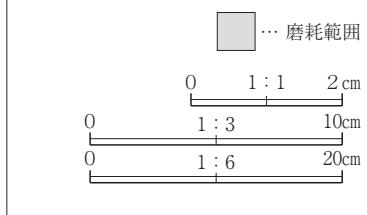
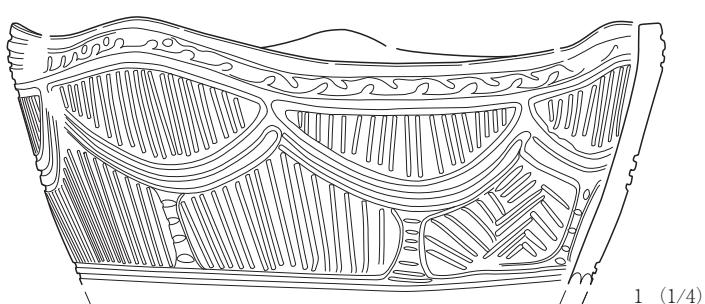


Fig.13 J - 1 · 2 号住居跡出土遺物

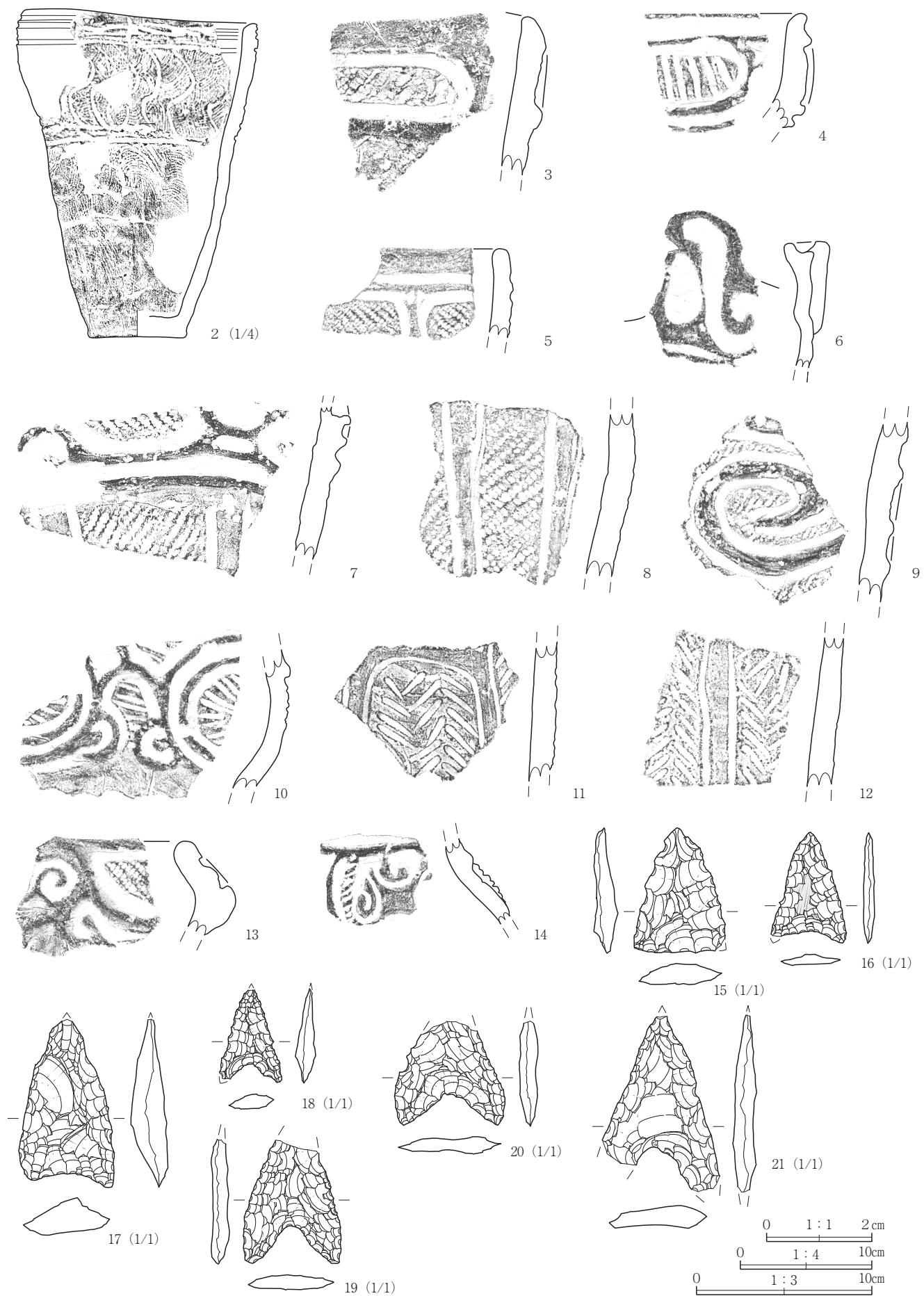


Fig.14 J-2号住居跡出土遺物

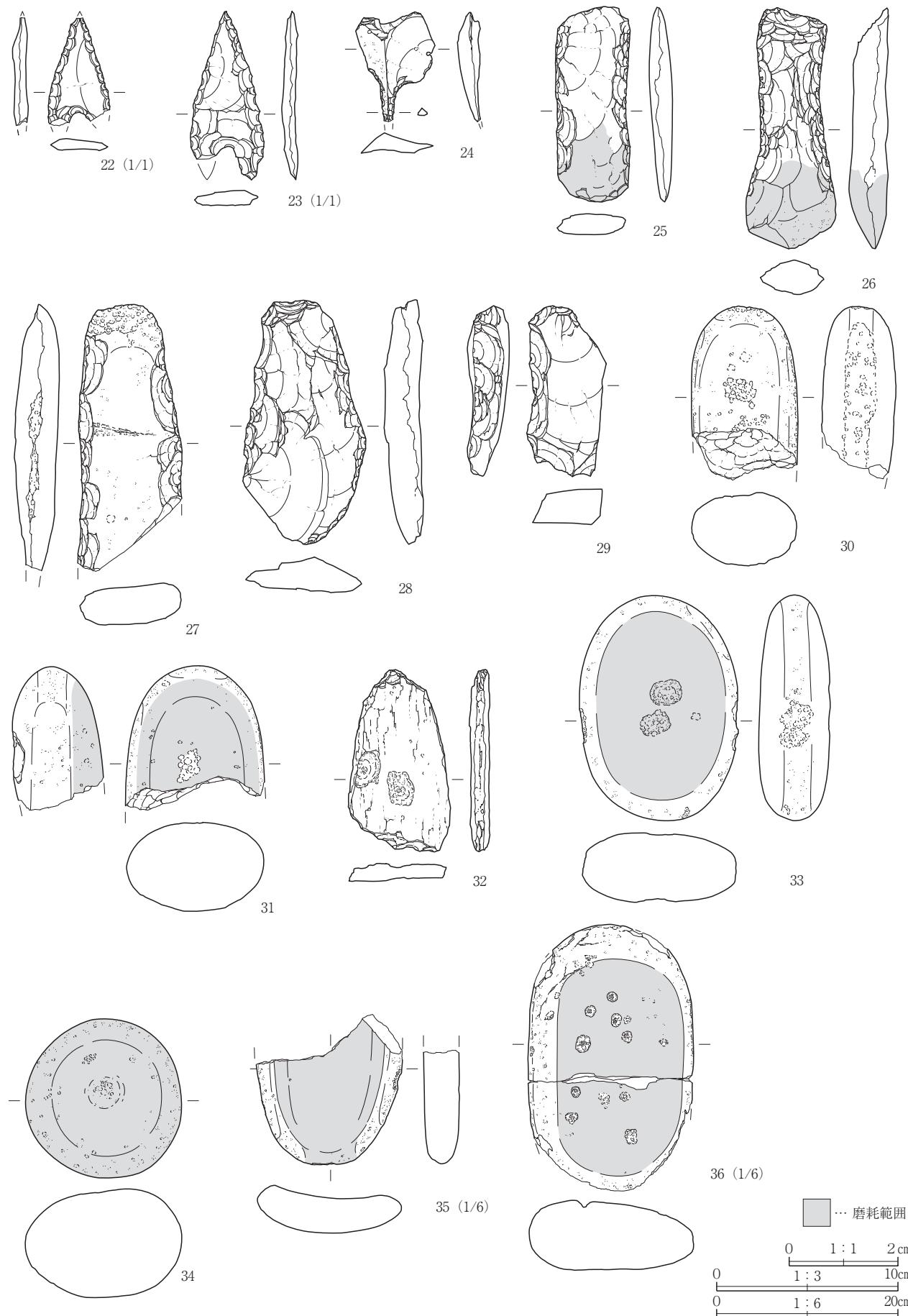


Fig.15 J - 2号住居跡出土遺物

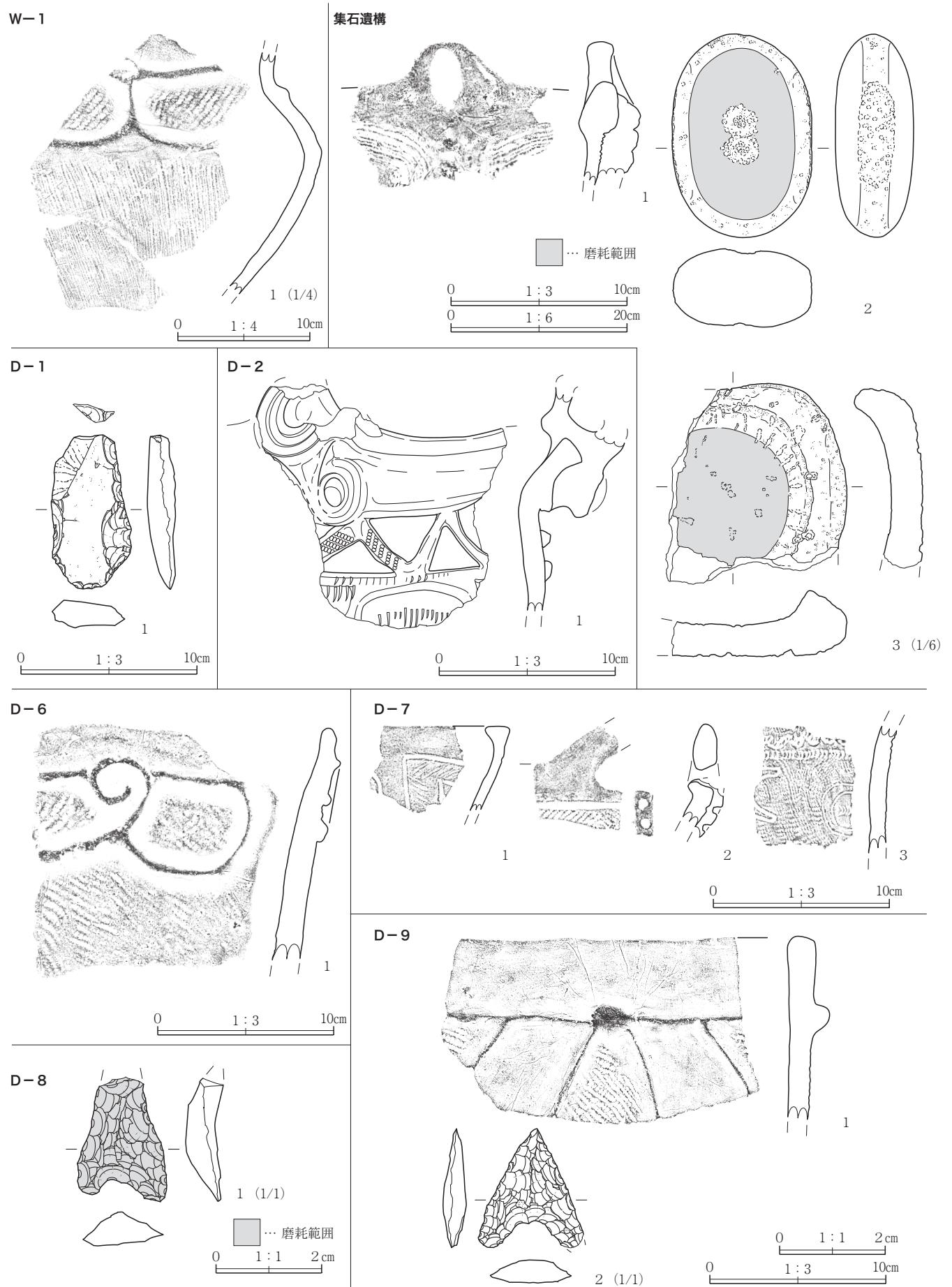


Fig.16 W-1号溝、集石遺構、D-1・2・6～9号土坑出土遺物

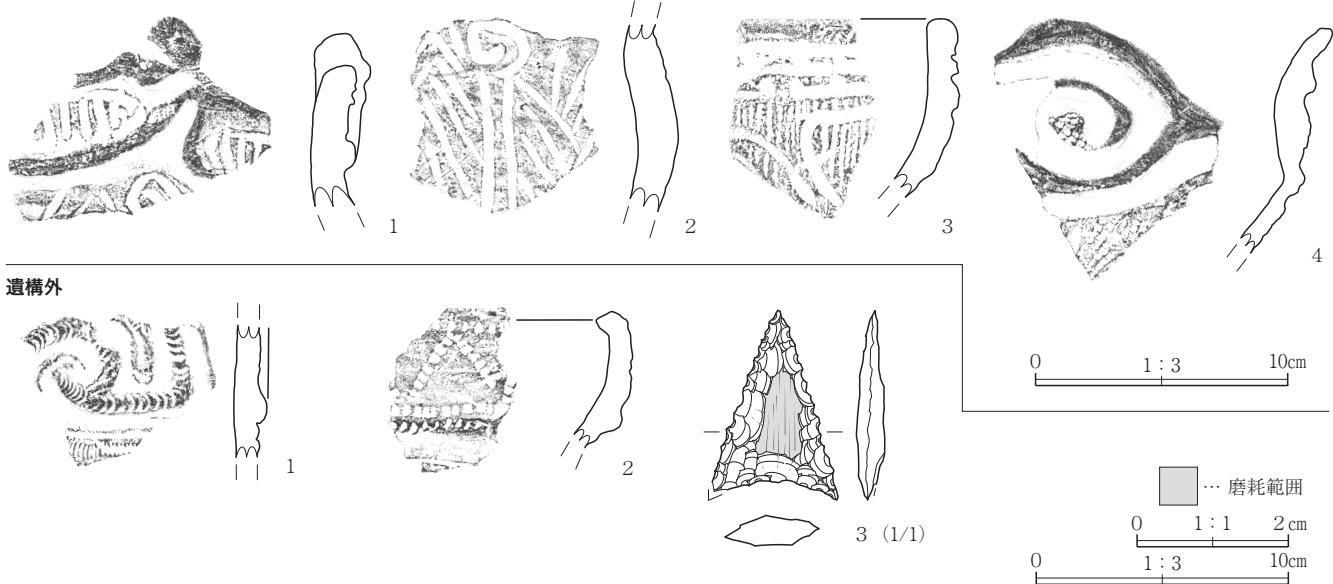


Fig.17 D-10号土坑、遺構外出土遺物

Tab. 3 横沢柴崎遺跡出土遺物観察表

## 旧石器

No	出土位置	種別、器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	17グリッド	石器 細石刃核	3.9	27	1.8	21.5	黒色頁岩	表面は押圧穂状剥離(長さ3.0cm以上4面、2.5cm以下4面、幅0.7~0.9cm)の細石刃を剥取。やや内湾する单設打面。矢出川技法による野岳・休場型細石刃核。	完存。

## J-1

No	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	外色調 内色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	埋設土器1	縄文 深鉢	28.0	8.9	32.0	黒粒 白粒	黒褐色 灰褐色	小波状口縁、口縁部無文帯下の細い隆線帯に4単位の瘤状突起、雑なL縄文を継ぐ斜位に施文、胴部に被熱痕跡。	口縁部~底部。 加曾利E IV。
2	埋設土器2	縄文 鉢	-	7.9	-	黒粒多 白粒少	明褐色 褐灰色	胴上部にL R縄文を横位に施文。	胴部~底部。 加曾利E IV。
3	No. 2	縄文 深鉢	-	-	-	黒粒 白粒	黒褐色 にぶい橙色	細いS線を逆V字形に垂下、R L縄文を横位に施文。	胴部。 加曾利E IV。
4	No. 3	縄文 深鉢	-	8.2	-	粗砂粒少 黒・白粒少	にぶい橙色 明褐色	胴部下半は縦位のナデ、底部外面もナデ。	底部。 加曾利E IV。
5	覆土	縄文 深鉢	-	-	-	黒粒少 白粒	明褐色 褐灰色	口縁部無文帯下の隆線帯からT字形の隆線を垂下、隆線をナデツケ。	口縁部。 加曾利E IV。
6	覆土	縄文 深鉢	-	-	-	砂粒 黒・白粒	褐灰色 にぶい橙色	口縁部無文帯下に瘤状突起のある細い隆線帯、R L縄文を斜位に施文。	口縁部。 加曾利E IV、スス付着。
7	覆土	縄文 深鉢	-	-	-	黒粒少 白粒	黒褐色 黒褐色	口縁部内湾、口縁部無文帯下の細い隆線帯から細い隆線を垂下、R L縄文を斜位に施文。	口縁部。 加曾利E IV。
8	覆土	縄文 深鉢	-	-	-	黒粒多 白粒少	灰褐色 明褐色	細い隆線を逆V字形に分岐懸垂させナデツケ、R L縄文を斜位に施文。	胴部。 加曾利E IV。
9	覆土	縄文 深鉢	-	-	-	砂粒少 黒・白粒少	にぶい赤褐色 灰褐色	2本組の細い隆線を逆V字形に垂下、隆線脇に楕円形刺突列、R L縄文を斜位に施文。	胴部。 加曾利E IV。
10	覆土	縄文 浅鉢	-	-	-	黒粒少 白粒少	赤褐色 にぶい橙色	小波状口縁、口縁部の下に連続刺突列、2条の沈線帯下に逆U字状の区画、R L縄文を斜位に施文。	口縁部。 加曾利E IV。
11	覆土	縄文 鉢	-	-	-	粗砂粒多	橙色 黒褐色	断面三角形の太い隆線帯から上側に横位の沈線で区画した2段の楕円形刺突列。	胴部。 中期後半。
12	覆土	縄文 深鉢	-	-	-	黒粒少 白粒多	褐灰色 黒褐色	波状口縁の頂部にC字状の突起、突起の中央に小孔をあけR L縄文を斜位に施文、口縁部下の沈線と隆線帯の間に横位2段の楕円形刺突列、突起下から細い隆線で分岐懸垂。	口縁部。 称名寺、スス付着。
13	覆土	縄文 深鉢	-	-	-	黒粒 白粒	にぶい橙色 にぶい橙色	捻転状の厚い環状把手、把手の側線に溝、中央に孔をあけ表側にC字状沈線。	把手。 称名寺。
14	覆土	縄文 注口土器	-	-	-	黒粒多 白・茶粒	にぶい橙色 明褐色	注口の上に重弧状沈線を描いた橋状把手、注口のまわりに二重沈線。	口縁部~胴部。 堀之内II。
No	出土位置	種別、器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
15	覆土	石器 石鏃 凹基無茎鏃	2.6	(2.2)	0.5	1.9	黒色安山岩	表・裏面共に周縁に微細な調整加工。基部は浅い抉り。	左脚部欠損。
16	覆土	石器 石鏃 凹基無茎鏃	(1.6)	1.7	0.4	0.8	黒曜石	押圧剥離後、周縁に微細な調整加工。基部の抉りは深い。	先端部欠損。
17	覆土	石器 石鏃 凹基無茎鏃	3.7	(2.3)	0.6	3.6	黒色安山岩	表・裏面共に周縁を調整加工した大型鏃。基部は浅い抉り。 側縁は外湾し中位に浅い抉れ。先端は丸みを帯びる。	左脚部欠損。
18	覆土	石器 打製石斧 短冊形	(9.5)	(4.3)	(1.5)	70.2	灰色安山岩	表面下半に自然面を残す。左右側縁の調整剝離は磨耗により滑らか。 裏面には広く剥落面が顕著。	刃部と裏面欠損。
19	覆土	石器 寛状石器	7.4	3.3	1.0	31.3	黒色頁岩	表面に広く自然面を残す横長削片石材。左右側縁に丁寧な調整剝離を施し短冊形に整形。刃部は円形の片刃で若干の刃こぼれ。	完存。
20	覆土	石器 楔形石器	4.5	3.4	1.3	18.0	チャート	表・裏面共に素材剝片段階の剝離面を広く残し、上端及び下端から右側縁にかけて両側から加工状の剥離。左側縁を除く周縁に潰れあり。	完存。
21	No. 4	石器 磬器	19.2	5.4	3.2	493.9	砂岩	細長い自然縫を素材に用いて、端部に片面調整の刃部を作出。基部にも僅かな剝離痕あり。	完存。
22	No. 5	石器 棒状石器	11.6	3.8	2.9	2127	黒色頁岩	端部に部分的な敲打痕。石器は全体に滑らかで、左右側面は研磨利用による平坦化。下半部に擦痕。	完存。
23	No. 7	石器 石棒	(13.7)	(7.1)	(6.5)	9528	雲母石英片岩	石器は全体に滑らかで、断面形状は隅丸の三角形を呈し、三面が平坦化。欠損後に研磨利用か。	頭部と基部欠損。
24	No. 6	石器 石皿	(12.6)	(16.1)	(5.9)	11467	輝石安山岩	表面は凹み部が顕著で使用面は滑らか。裏面に深さ~1.0cmを計る孔が5ヶ所あり。	破片。
25	覆土	石器 多孔石	19.4	16.3	5.8	20610	角閃石安山岩	直径約1.9cmの孔は深さ1.2cmと0.9cm。孔が穿たれた面は広く磨耗による平坦化が顕著で、石器は全体に滑らか。	完存。

J - 2

No	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	外色調 内色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	No. 2 炉体	縄文 深鉢	335	-	-	茶粒 黒粒白粒	橙色 明灰褐色	4 単位の波状口縁、3条の口縁部沈線帯の上段に交互刺突、9単位の3本組沈線の連弧文、3条の胴部沈線帯の下段に交互刺突、地文は綾位の沈線を充填(矢羽状部分あり)。	口縁部～胴部。 加曾利 E III。胴部で切断。
2	19グリッド	縄文 深鉢	190	7.6	25.5	砂粒少 黒粒白粒	黒褐色～明褐色 にぶい赤褐色	口縁部に4条の沈線帶、胴部に2条の沈線帶、両沈線帶間に波状の垂下沈線を連続施文、地文は5本歯の櫛状工具による波状条線を雜に施文(胴下半部は浅くなる)。	口縁部～底部。 加曾利 E III。
3	22グリッド	縄文 深鉢	-	-	-	砂粒 白粒	暗赤褐色 にぶい赤褐色	口縁部に沈線でなぞった隆線で楕円形区画、R L縄文を区画内充填と地文に施文。	口縁部。 加曾利 E III。
4	23グリッド	縄文 深鉢	-	-	-	黒粒 白粒	淡橙色 褐褐色	口縁部に隆線と沈線で楕円形区画、綾位の短沈線を充填。	口縁部。 加曾利 E III。
5	18グリッド	縄文 深鉢	-	-	-	黒粒 白粒	褐灰色 にぶい赤褐色	2条の沈線帯から2本組の沈線を垂下、R L縄文を斜位に施文。	口縁部。 加曾利 E III。
6	22グリッド	縄文 深鉢	-	-	-	黒粒 白粒多	にぶい橙色 橙色	大きな突起上面から綾位の半渦巻状の太い沈線、突起下に隆線帯。	口縁部(把手)。 加曾利 E III。
7	22グリッド	縄文 深鉢	-	-	-	砂粒多 黒粒白粒	明褐灰色 褐灰色	口縁部に渦巻の隆線、隆線の楕円形区画内にR L縄文を充填、胴部に2本組の沈線を垂下、地文に斜位のR L縄文。	胴上部。 加曾利 E III。器面剥落。
8	22グリッド	縄文 深鉢	-	-	-	黒粒多 白粒多	明赤褐色 暗赤褐色	2本組の沈線を垂下、R L縄文を斜位に施文。	胴部。 加曾利 E III。
9	23グリッド	縄文 深鉢	-	-	-	茶粒 黒粒白粒	にぶい橙色 にぶい赤褐色	隆線による大きな渦巻、沈線でなぞる、R L縄文を斜位に施文。	胴上部。 加曾利 E III。
10	19グリッド	縄文 深鉢	-	-	-	黒粒 白粒	にぶい橙色 明灰褐色	隆線の弧状区画内に綾位の短沈線を充填、その下に小渦巻沈線を対に施文、2本組の隆線による強状区画内に放射状の短沈線を充填。	胴上部。 加曾利 E III。
11	18グリッド	縄文 深鉢	-	-	-	黒粒 白粒多	褐灰色 にぶい橙色	綾位の沈線の間に楕円形沈線区画、矢羽状の短沈線を充填。	胴部。 加曾利 E III。
12	25グリッド	縄文 深鉢	-	-	-	茶粒 黒粒白粒	にぶい赤褐色 黒褐色	2本組の沈線を垂下、R L縄文を斜位に施文。	胴部。 加曾利 E III。
13	23グリッド	縄文 深鉢	-	-	-	黒粒多 白粒	にぶい赤褐色 暗赤褐色	口縁部内湾、口縁下に隆線による渦巻と楕円形区画、R L縄文を区画内に充填、横位の弦状沈線。	口縁部。 加曾利 E II。
14	23グリッド	縄文 鉢か	-	-	-	細砂粒	褐灰色 黒褐色	頭部の隆線帯から刻みのある弧状隆線を垂下、少渦巻沈線を上下左右に施文、口縁部の内外面に赤彩、ミガキ。	胴上部。 勝坂。
No	出土位置	種別、器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
15	23グリッド	石器 石鏃 平基無茎鏃	2.4	(1.75)	0.4	1.4	黒色安山岩	表・裏面共に押圧剥離により全面加工を施し、左右側縁は弱い鋸歯状を呈する。	右脚部端欠損。
16	19グリッド	石器 石鏃 平基無茎鏃	2.1	1.5	0.2	0.4	黒曜石	表・裏面共に押圧剥離により丁寧に薄く整形。中央部に磨痕。基部は浅い抉り。	左脚部端欠損。
17	23グリッド	石器 石鏃 凹基無茎鏃	(3.1)	1.8	0.7	3.1	チャート	表面中央に陵を有して押圧剥離で調整し、先端が狭小する左右側縁を整形。基部は浅く抉り。裏面に磨耗が顕著で、難利用か。	先端欠損。
18	17グリッド	石器 石鏃 凹基無茎鏃	(1.8)	1.2	0.3	0.4	黒曜石	表・裏面共に押圧剥離で整形。両縁とも弱い鋸歯状。基部の抉りはやや深い。	先端及び左脚部端欠損。
19	11グリッド	石器 石鏃 凹基無茎鏃	(2.35)	1.9	0.35	1.3	黒色安山岩	表・裏面共に押圧剥離で調整し、周縁は調整剝離で整形。基部は深く抉りやや長脚の形状を作出。	先端部欠損。
20	17グリッド	石器 石鏃 凹基無茎鏃	(2.0)	2.1	0.4	1.3	チャート	表・裏面共に押圧剥離で調整し、周縁は調整剝離で整形。左右側縁基部付近が外湾。基部は山形に抉り。	先端部欠損。
21	19グリッド	石器 石鏃 凹基無茎鏃	(3.3)	(2.2)	0.45	2.5	黒色頁岩	表・裏面共に素材の剝離面を広く残し、周縁に調整剝離を施した大型の鏃である。先端は抉り少し、左右側縁中央付近が僅かに括れる。基部は深く抉る。	先端及び左右脚部端欠損。
22	8グリッド	石器 石鏃 凹基無茎鏃	(2.0)	1.1	0.25	0.5	黒色頁岩	横長剝片素材を用いて、左右側縁及び基部に調整剝離を施し細身の形状を整形。基部抉り。	先端及び左右脚部端欠損。
23	17グリッド	石器 石鏃 凹基無茎鏃	3.1	1.4	0.3	1.0	黒色頁岩	表・裏面共に素材の剝離面を広く残し、周縁に丁寧な調整剝離を施し細身の形状。左右側縁は弱い鋸歯状を呈する。	左脚部端欠損。
24	25グリッド	石器 石錐	(6.1)	4.4	1.3	16.6	黒色頁岩	表面に自然面を残す縦長剝片素材。下半部に連続する丁寧な調整剝離を施し長い難利用部。	先端欠損。
25	19グリッド	石器 打製石斧 短冊形	10.8	4.1	1.35	82.6	黒色頁岩	裏面に広く自然面を残す横長剝片素材。左右側縁に漬し状の調整剝離を施し短冊形に整形。刃部は素材の銳利な線刃を利用し、刃部周辺は磨耗により滑らか。	完存。
26	17グリッド	石器 打製石斧 短冊形	13.2	5.0	2.2	148.6	ホルンフェルス	表面下端に自然面を残し、左右側縁に丁寧な漬し状の調整剝離を施し刃部が刃部に刃部は広がる。表・裏面共に刃部は磨耗により滑らか。	完存。
27	17グリッド	石器 打製石斧 短冊形	(14.7)	5.8	2.4	250.3	砂岩	表面に広く自然面を残す横長剝片素材。表・裏共に左右側縁にやや粗い漬し状の調整剝離により短冊形整形。左右側縁中位には磨耗による潰れが顕著。上端部に粒状の使用痕。	下端(刃)部欠損。
28	24グリッド	石器 打製石斧 擦形	13.5	6.8	215	192.4	黒色頁岩	大型で薄手の横長剝片を素材に用い、左右側縁に弱い漬し調整を施し銳利な側縁を整形。刃部は銳利な線刃を斜位に利用。	完存。
29	17グリッド	石器 削器	9.4	4.3	2.3	109.7	黒色頁岩	裏面上半部に自然面を残す縦長剝片素材。表面左側縁に粗い調整剝離を施し刃部を作出。	完存。
30	No. 3	石器 凹石	(9.6)	5.9	4.1	285.3	安山岩	表面中央付近にやや浅い痘状の敲打痕による凹み。左右側縁にも敲打による平坦化。石器は全体に滑らか。	下半部欠損。
31	No. 4	石器 凹石	(7.9)	7.7	5.0	381.0	輝石安山岩	表面中央付近に敲打痕による凹み。広く磨耗範囲が顕著。裏面には被熱による内部剥離があり。	下半部欠損。
32	17グリッド	石器 凹石	9.1	5.6	1.1	89.7	緑泥片岩	表面は2ヶ所の凹み部が顕著で、裏面中央付近にも僅かな凹み部あり。板状剥片素材。	周縁破損。
33	19グリッド	石器 凹石	12.5	8.7	3.9	695.0	角閃石安山岩	表面中央付近に2ヶ所、裏面中央に1ヶ所のやや浅い痘状の凹部。左右側縁中央付近にも痘状の敲打痕。表・裏面共に広く磨耗により滑らか。	完存。
34	17グリッド	石器 磨石	8.7	8.7	6.0	559.1	輝石安山岩	全体に磨耗により滑らかで、表・裏中央付近に敲打により僅かな平坦化。	完存。
35	24グリッド	石器 石皿	(16.6)	(16.1)	(5.3)	1251.0	多孔質安山岩	表面の磨耗範囲は左右に陵を有して凹み、磨耗面下端部は緩やかに下降して陵を持たない。	下半部残存。
36	No. 1	石器 多孔石	29.4	18.3	7.7	6220.0	輝石安山岩	表面は最大径18cm・深さ0.3cm～0.8cmを計る孔が10ヶ所に顕著で、僅かな敲打痕の集中が数ヶ所にある。表・裏面共に広く磨耗による平坦化が顕著。	完存。

W - 1

No	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	外色調 内色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	覆土	縄文 両耳壺	-	-	-	黒粒多 白粒少	にぶい橙色 にぶい橙色	胎上部を横線で楕円形区画し沈線でなぞる。隆線の接点に瘤状突起、R L縄文を斜位に施文、胴下半部は条線を綾位に施文。	頸部～胴部。 加曾利 E III。

集石遺構

No	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	外色調 内色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	No. 1	縄文 深鉢	-	-	-	砂粒多 黒粒	にぶい橙色 灰褐色	山形突起に楕円状の窪み、刺突穴のある隆線を垂下、櫛状工具で楕状に条線を施文。	口縁部。 加曾利 E III。
2	No. 3	石器 凹石	11.5	8.0	4.5	6022	角閃石安山岩	表・裏面共に中央付近に2ヶ所の凹み。凹み部のまわりは磨耗により滑らか。左右側縁には敲打による平坦化。	完存。
3	No. 2	石器 石皿	(22.8)	(20.5)	8.1	3016.0	多孔質安山岩	表面は使用範囲の凹部が深く、凹底面の磨耗が顕著。裏面は平坦で、深さ0.4cm～0.8cmの孔が約30ヶ所あり。	1/4 残存。

## D - 1

No	出土位置	種別、器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	覆土	石器 打製石斧 短冊形	8.7	4.6	1.6	71.5	灰色安山岩	表面に広く自然面を残す横長削片素材。表・裏面共に左右側縁にやや粗い削離を施し整形。表面左側縁上部は節理割れ。	完存。

## D - 2

No	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	外色調 内色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	No. 1	縄文 深鉢	-	-	-	砂粒多 白粒	赤褐色 赤灰色	環円状の突起を複数張り合わせた大きな把手は大部分が欠損、口縁部無文帯下にR L 縄文を施した鋸歯状の隆線、刻みを付けた隆線帯と垂下隆線、胴部下半地文は綴位の条線。	口縁部。 中期中葉末。

## D - 6

No	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	外色調 内色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	覆土	縄文 深鉢	-	-	-	砂粒多 黒粒白粒	灰褐色 にぶい橙色	口縁部無文帯下に隆線の渦巻、梢円形区画内にR L 縄文を斜位に施す。	口縁部・胴部。 加曾利E III。

## D - 7

No	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	外色調 内色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	覆土	縄文 鉢	-	-	-	黒粒少 白粒	赤褐色 暗赤褐色	口縁内折状、沈線の方形区画内に細いL 縄文を斜位に施す、ミガキ。	口縁部。 称名寺。
2	覆土	縄文 深鉢	-	-	-	砂粒多	黒褐色 灰褐色	太い帶状の山形把手下に円形刺突のある隆線を垂下、口縁部無文帯下の沈線区画に細いL R 縄文を斜位に施す。	口縁部。 称名寺。
3	覆土	縄文 深鉢	-	-	-	黒粒少 白粒少	褐褐色 黒褐色	半截竹管による横位直線状と波状の押引文、2重沈線のC字状文、地文は7本筋の櫛状工具による連続刺突。	胴部。 中期中葉。異系統。

## D - 8

No	出土位置	種別、器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	覆土	石器 石鎌 凹基無茎鎌	(24)	1.7	0.7	2.3	黒色頁岩	表面は全面に調整剝離による整形。裏面は素材の剝離面を広く残し、周縁加工。左右側縁中位に弱い括れを持つ。全体に磨耗が顕著。厚手。	先端部欠損。

## D - 9

No	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	外色調 内色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	覆土	縄文 深鉢	-	-	-	砂少 黒粒白粒	にぶい橙色 橙色	口縁部無文帯下の瘤状突起のある細い隆線帯から隆線を分岐懸垂、L R 縄文を斜位に施す。	口縁～胴上部片。 加曾利E IV。
No	出土位置	種別、器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
2	覆土	石器 石鎌 凹基無茎鎌	(22)	2.1	0.45	1.5	黒色安山岩	表面は丁寧な押圧剝離で左右側縁を整形。先端部は狭小し、凹基部は台形様で深い。裏面は中央に素材の剝離面を広く残し、周縁に丁寧な調整加工。脚部先端は丸みあり。	右脚部端欠損。

## D - 10

No	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	外色調 内色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	覆土	縄文 深鉢	-	-	-	黒粒多 白粒多	黒褐色 黒褐色	波状口縁に小渦巻を施した円形の突起、隆線と沈線による梢円形区画の内に綴位の短沈線、胴部に小渦巻状の沈線と矢羽状の短沈線。	口縁部。 加曾利E III。2と同一。
2	覆土	縄文 深鉢	-	-	-	砂粒少 黒粒白粒	にぶい橙色 黒褐色	小渦巻状沈線から2本組の沈線を垂下、矢羽状の短沈線を施す。	胴部。 加曾利E III.1と同一。
3	覆土	縄文 深鉢	-	-	-	砂粒多 黒粒白粒	橙色 にぶい橙色	口縁下に3条の沈線と2段の刺突列、R L 縄文を綴位に施した後沈線で弧状区画。	口縁部。 加曾利E III。
4	覆土	縄文 深鉢	-	-	-	黒粒少 白粒少	黒褐色 黒褐色	波状口縁と山形突起、太い渦巻状の沈線の中心部にR L 縄文を施す、胴部にR L 縄文を斜位に施す。	口縁部。 加曾利E III。

## 遺構外

No	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	外色調 内色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	22 グリッド	縄文 深鉢	-	-	-	茶粒 黒粒白粒	にぶい赤褐色 にぶい橙色	分岐した刻みのある隆線により方形や弧状の区画、区画内に半截竹管の平行沈線とキヤタビラ文。	胴部。 勝坂II 平行。
2	23 グリッド	縄文 深鉢	-	-	-	黒粒 白粒	赤褐色 暗赤褐色	口縁内湾し肥厚、口縁部下と横位の刻みある隆線帯間に半截竹管による押引文、その間に鋸歯状の押引文。	口縁部。 勝坂II 平行。
No	出土位置	種別、器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
3	覆土	石器 石鎌 凹基無茎鎌	(24)	1.7	0.7	2.3	黒色頁岩	表面は周縁調整により整形。裏面は剝離面を広く残し、周縁に加工。左右側縁は鋸歯状中央部に磨痕。脚部先端は尖形。	左足端部欠損。

## VI まとめ

### 1 旧石器時代の細石刃核について (Fig.12、Tab. 3、PL. 2)

東区の17グリッドから縄文土器に混ざって旧石器が1点出土した。これは細石刃核であり、黒色頁岩の剥片を素材とする複数剥離の単設打面をもち、矢出川技法による野岳・休場型に分類できる。

周辺遺跡の類例として、北方3kmの寺沢川上流にある横沢新屋敷遺跡からは、同様タイプの細石刃核が単独で出土していて出土状況や形態等は類似するが、石材が緑色の珪質岩である。また、北方に約4km離れた荒砥川支流域にある標高280mの市之関前田遺跡からは、野岳・休場型の石核による細石刃283点が文化層としてのまとまりをもって検出されている。本遺跡出土の石核に残る細石刃の剥離面は、長さ3.0cm以上が6面、2.5cm以下が4面、幅が0.7～0.9cmあり、市之関前田遺跡出土の細石刃と同等の大きさを測る。しかし、市之関前田遺跡の石材は、削器や剥片には在地系の黒色安山岩や黒色頁岩が多く用いられているにもかかわらず、細石核及び細石刃では搬入品の黒曜石が圧倒的多数を占めている。また、湧別技法の細石器が中心である竜の口川中流域の鳥取福蔵寺遺跡（標高130m）や荒砥川下流域の頭無遺跡（標高108m）では、搬入品である硬質頁岩が主体であるが、幌加技法の細石器が中心である柏川上流域の樹形遺跡（標高415m）や寺沢川上流域の柏倉芳見沢遺跡（標高380m）では、在地系の黒色頁岩が主体的に用いられている。

今回、本遺跡でみつかった細石刃核は、県内では少数派に属する野岳・休場型のものであるが、このタイプではほとんどみられない在地系の黒色頁岩を使用していることなど、その位置づけが今後の課題である。

### 2 縄文時代の出土遺物について (Tab. 4・5)

今回の調査で出土した遺物は、ほとんどのものが縄文時代の土器及び石器である。

土器片の総数は7,731点125,916gを数える。その中でもかなりな量の土器片が摩滅化・碎片化していく型式の判別が不確かであることから全体の把握はできなかった。概要としては、縄文時代中期後半の土器片が9割以上を占めていて、数%しかない中期前半やさらに少ない前期及び後期前半の土器片は客体的な存在である。

J-1の出土土器はほとんどが敷石面から浮いているが、中期後半の中でも加曽利EⅣ式が極めて多く、埋設土器2個体も同時期であることから加曽利EⅣ期の住居跡と考えられる。しかし、勝坂期から称名寺期・堀之内期までの土器片もわずかながら混在する。J-2は、炉体土器によって加曽利EⅢ期と考えられる。確実な床直遺物がないものの覆土中から加曽利EⅢ式の土器片を主体に出土している。土坑では、D-1・2・4から勝坂Ⅱ式の出土点数が多く、D-10から加曽利EⅢ式、D-9・11から加曽利EⅣ式、集石遺構から加曽利EⅣ～称名寺式の土器片数が他の土坑よりも多い。遺構外では、中期前半土器の出土比率が少し高めである。

石器は、全部で872点出土していて、剥片石器が838点で礫塊石器が34点であった。剥片石器のうち製品が占める割合は26%である。製品としては、石鏃17点、削器67点、楔形石器14点、そして石鎧・石匙・石錐・礫器・磨製石斧が1～2点ずつのほか114点もの打製石斧が出土している。打製石斧は住居跡・各土坑・溝・遺構外など調査区のほぼ全体にみられ、特にJ-2に多いが、完形品は9%以下であり基部のみの残存が多くほとんど形態がわからない。石鏃は大小様々で、形態は基部を少し抉った凹基無茎のものが多い。礫塊石器は、凹石を筆頭に磨石・石皿・多孔石などが、住居跡と集石遺構や溝などから偏ってみられ、土坑や遺構外からは出土していない。祭祀道具である石棒は、2次的な出土状況の溝を除けばJ-1からの出土に限られる。また、東区のグリッドごとの遺物については、特徴等が見受けられなかった。剥片石器の大部分を黒色頁岩と黒色安山岩、礫塊石器の大部分を輝石安山岩と角閃石安山岩の在地石材が占める中、搬入品は貴重であり、黒曜石は碎片の24点以外は石鏃しかみられず、さらに、緑泥片岩・結晶片岩製の石棒はよくみかけるが、凹石への使用はとても珍しい。灰色安山岩は在地の石材であるが、打製石斧以外にはほとんど利用されていない。石皿は破片が4点のみであるが、J-1の敷石や自然礫には、表面が磨られたり敲かれた痕がついたものもみられる。

Tab. 4 遺構別石器器種組成表

遺構名	石鏃	打製石斧	石鎧	石匙	削器	石錐	礫器	楔形石器	磨製石斧	剥片	碎片	石皿	多孔石	凹石	磨石	敲石	石棒	棒状石	他	合計
J - 1	3	3	1	-	7	-	1	2	-	30	21	1	1	-	-	-	2	2	74	
J - 2	10	51	-	-	26	1	-	4	2	149	117	1	1	7	4	-	-	-	373	
D - 1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	2	4	-	-	-	-	-	-	-	7	
D - 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
D - 3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
D - 6	1	6	-	-	4	1	-	2	-	25	16	-	-	-	-	-	-	-	55	
D - 7	-	7	-	1	5	-	-	2	-	25	13	-	-	-	-	-	-	1	54	
D - 8	1	2	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	5	
D - 9	1	4	-	-	-	-	-	-	-	-	5	-	-	-	-	-	-	-	10	
D - 10	-	4	-	-	1	-	-	1	-	9	4	-	-	-	-	-	-	-	19	
D - 11	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	1	-	-	-	3	
集石遺構	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	2	2	-	-	-	-	9	
W - 1	-	17	-	-	9	-	-	-	-	20	25	-	-	1	1	1	2	1	77	
W - 2	-	2	-	-	3	-	-	2	-	10	7	-	-	1	-	-	-	-	25	
遺構外	1	15	-	-	11	-	-	1	-	35	96	-	-	-	-	-	-	-	159	
合計	17	114	1	1	67	2	1	14	2	310	309	4	4	10	7	1	4	4	872	

Tab. 5 石材別石器器種組成表

石材名	石鏃	打製石斧	石鎧	石匙	削器	石錐	礫器	楔形石器	磨製石斧	剥片	碎片	石皿	多孔石	凹石	磨石	敲石	石棒	棒状石	他	合計
黒色頁岩	5	60	1	1	53	2	-	7	-	218	194	-	-	-	-	1	-	1	543	
頁岩	-	7	-	-	5	-	1	-	-	-	5	3	-	-	-	-	-	-	21	
珪質頁岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-	3	
チャート	2	-	-	-	-	-	-	3	-	4	11	-	-	-	-	-	-	-	20	
砂岩	-	9	-	-	1	-	-	1	-	12	2	-	-	-	1	-	1	1	28	
黒色安山岩	7	6	-	-	6	-	-	3	-	53	68	-	-	-	-	-	-	-	143	
灰色安山岩	-	26	-	-	1	-	-	-	-	13	4	-	-	-	-	-	-	-	44	
黒曜石	3	-	-	-	-	-	-	-	-	1	24	-	-	-	-	-	-	-	28	
ホルンフェルス	-	2	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	
粘板岩	-	3	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	5	
緑色岩	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
蛇紋岩	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	
緑泥片岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	1	-	-	-	-	3	
結晶片岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	2	
安山岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	3	
輝石安山岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2	2	4	-	-	1	11		
角閃石安山岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	3	1	-	-	-	-	6	
多孔質安山岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	2	
石英閃綠岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	1	-	-	3	
珪化木 他	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	
合計	17	114	1	1	67	2	1	14	2	310	309	4	4	10	7	1	4	4	872	

### 3 柄鏡形敷石住居跡について (Fig.18・19、Tab. 6)

柄鏡形敷石住居跡は、加曽利E III期から加曽利B I期まで関東甲信越地域に広く分布する住居形態のひとつであり、群馬県でも赤城山西南麓の開けた地域から北毛地域や西毛地域の山間部にいたるまで400例に近いものと思われる。ここでは、加曽利E IV期の赤城山西南麓地域における柄鏡形敷石住居跡のあり方を池田氏による集成（文献100）を参考に本遺跡の位置づけをみていきたい。対象資料はTab. 6の16遺跡43例である。以前から柄鏡形敷石住居跡の報告書中に「中期末から後期初頭」という時期設定されるものを多くみるが、加曽利E IV式と称名寺I式はある段階において共伴関係にあるということであろう。加曽利E IV式の時間幅とその後続型式との分類などについては力量不足のため言及せず報告書のままで取り扱い、表中に漏れてしまった遺跡もあると思われるが、簡単なまとめと課題にとどまることをご容赦願いたい。

今回取り上げた遺跡は、遺構の時期など構成内容によっていくつかのパターンに分けられる。加曽利E III期の柄鏡形敷石住居跡が検出された三原田遺跡や曲沢遺跡は、広大な台地に占地した大規模な環状集落であり、加曽利E IV期のピークを過ぎても後期前半まで柄鏡形敷石住居跡が存続していて、同様の集落は西毛の野村遺跡・田篠中原遺跡、北毛の横壁中村遺跡など地域ごとの中核的集落となっている。また、三原田遺跡では全住居跡341例中に柄鏡形敷石住居跡は47例であったが、加曽利E IV期に限っては住居跡25例中に18例もの柄鏡形敷石住居跡が検出され、当時は特別な住居ではなく一般的なものであった可能性も高い。芳賀東部団地遺跡でも60例

の全住居跡中1割だった柄鏡形敷石住居跡は、加曽利EⅣ期における3例はすべて柄鏡形敷石住居跡である。加曽利EⅣ期の住居跡13例中5例の柄鏡形敷石住居跡がある市之関前田遺跡、同様に8例中2例の堀越並木遺跡、3例中2例の西小路遺跡、5例中1例の五代山街道Ⅰ遺跡、4例中1例の瀬戸ヶ原遺跡などは、加曽利EⅣ期以外では柄鏡形敷石住居跡が確認できない。また、大規模集落である山ノ上遺跡でも、加曽利EⅣ期の住居3例のうち1例しか柄鏡形敷石住居跡がなく他時期のものはみあたらない。芳賀北曲輪遺跡では、加曽利EⅣ期の住居1例が柄鏡形敷石住居跡であり、後期にも柄鏡形敷石住居跡が存続する。

小規模な遺跡の五代木福Ⅱ遺跡では、配石遺構と報告されている石敷きの中央に炉があることから、現時点では単独で存在する柄鏡形敷石住居跡と思われる。周辺には五代伊勢宮遺跡や五代深堀遺跡などの縄文中期の大規模集落があるにも関わらず、加曽利EⅣ期には集落が衰退してしまっている。小室遺跡の柄鏡形敷石住居跡は、本遺跡のものと規模・形状などきわめて類似しているばかりか、隣接した加曽利EⅢ期の竪穴住居跡の存在も同じである。双方とも広い緩傾斜台地に立地することから集落の一角であると思われ、柄鏡形敷石住居跡の単独の存在ではない。柄鏡形敷石住居跡が単独でみつかっているのは、梨の木平遺跡、乾田遺跡、水上石器時代住居跡などのように山間部にある狭小なテラス状台地といった限られたスペースに立地した遺跡である。

柄鏡形敷石住居跡は、加曽利EⅣ式もしくはその直後段階で途絶えてしまう荒砥前原遺跡、西小路遺跡、市之関前田遺跡、称名寺Ⅱ期まで継続する三原田遺跡、芳賀北曲輪遺跡、芳賀東部団地遺跡、さらに堀之内期まで存続する曲沢遺跡、荒砥二之堰遺跡とパターン分けができる。後期になってから柄鏡形敷石住居跡が登場する八崎前中後遺跡、堤遺跡、大道遺跡、安通遺跡、上鶴ヶ谷遺跡、千網谷戸遺跡、中原遺跡、一丁田遺跡、東長岡戸井口遺跡などもあり、ひとつの遺跡から検出される柄鏡形敷石住居跡は2~3例くらいであるが、集落数と分布範囲が拡大するものの、やがて終息に向かっていく。柄鏡形敷石住居跡の衰退時期である堀之内Ⅱ期から加曽利BⅠ期以降は、祭祀や身体装飾が色濃くなり、配石墓や石組遺構による祭祀が盛り上がっていく。

本遺跡の柄鏡形敷石住居跡の設計について、他住居跡との共通性を加味して考えてみたい。設計にあたっては賛否あるものの両手を広げた長さ「尋（ひろ）」（160~190cm）を基準に考えた場合、半径1尋で円を描き傾斜面下側に向かって長さ1尋の張出を設けると、全長5~6m幅3.5mほどの規模になり、この時期の柄鏡形敷石住居跡の規模とおよそ合致する。円の中心から張出側へ70~80cmの大きさで石囲炉を造る。炉石は割られその内側は細かく破碎され、破片は掃除されているが、炉石はボロボロになっている。同様な破碎行為は三原田遺跡でも5例あり、芳賀東部団地遺跡、市之関前田遺跡、荒砥前原遺跡にもみられる。炉から同じ距離の位置に張出連結部のやや内側に土器を埋設する。張出はほぼ炉の幅で、連結部の両側に対ピットを設けるがひとつにつながっている。張出の中央には石棒状の框石を置き外側の石敷きが一段下がっている。この張出の段差は小室遺跡にも同様のものがみられる。框石の左右には、入口部のピットを設ける。張出の先端にも土器を埋設し、二つの埋設土器をもつ柄鏡形敷石住居跡は、三原田遺跡に4例あり、市之関前田遺跡や西小路遺跡にもみられる。張出連結部には埋設土器の代わりに石組施設を設けたものもある。石敷は全体的に丁寧で、特に炉の奥側では小礫によって間詰めをしている。本体の敷石はほぼ六角形に敷き詰めその各角に柱穴を掘って柱を建てている。六角形の敷石の外側には柱間をつなぐように縁石が並べられ、その外側に環礫がみられる。残念ながら、東側の敷石の一部はW-2によって壊されている。本遺跡の柄鏡形敷石住居跡は、全面に石を敷いているが、これは稀で、ほとんどのものは炉の周囲や壁際の一部に敷石が残っている程度であり、環状に敷いたものもみられる。

J-1の遺構の構築については、以下の通りである。①位置を決め竪穴全体を掘り下げる。②敷石下に土を張る。③ある程度の敷石を敷く。④炉穴・埋設土器穴・柱穴を掘る。⑤石囲炉を造る。埋設土器を埋める。柱を建てる。⑥前項の周囲の敷石や縁石を整える。⑦土壁または上屋壁と柱の間を造作する。このうち③の石敷きは⑤の後でもできるが、柄鏡形敷石住居跡の構築では石を敷く行為がメインであり、住居上屋の材木や屋根材を準備する以上に手間をかけて大小の礫を採集・運搬しなければならず、構築工程の中でも重要であるため先行するも

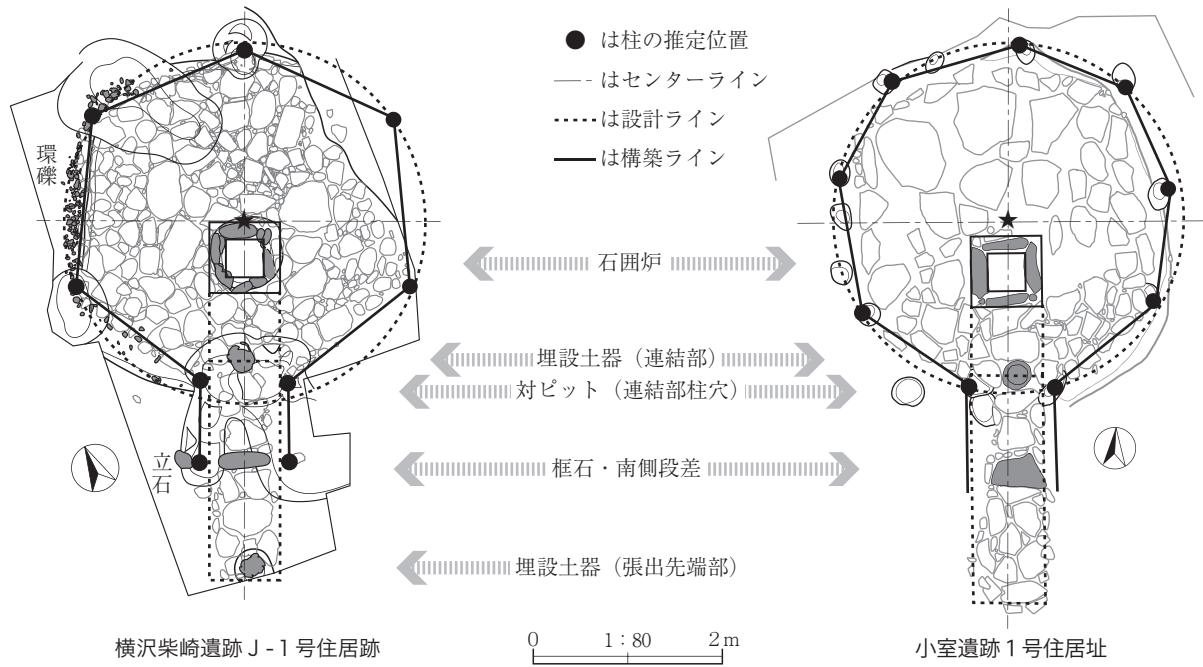


Fig.18 柄鏡形敷石住居構造図

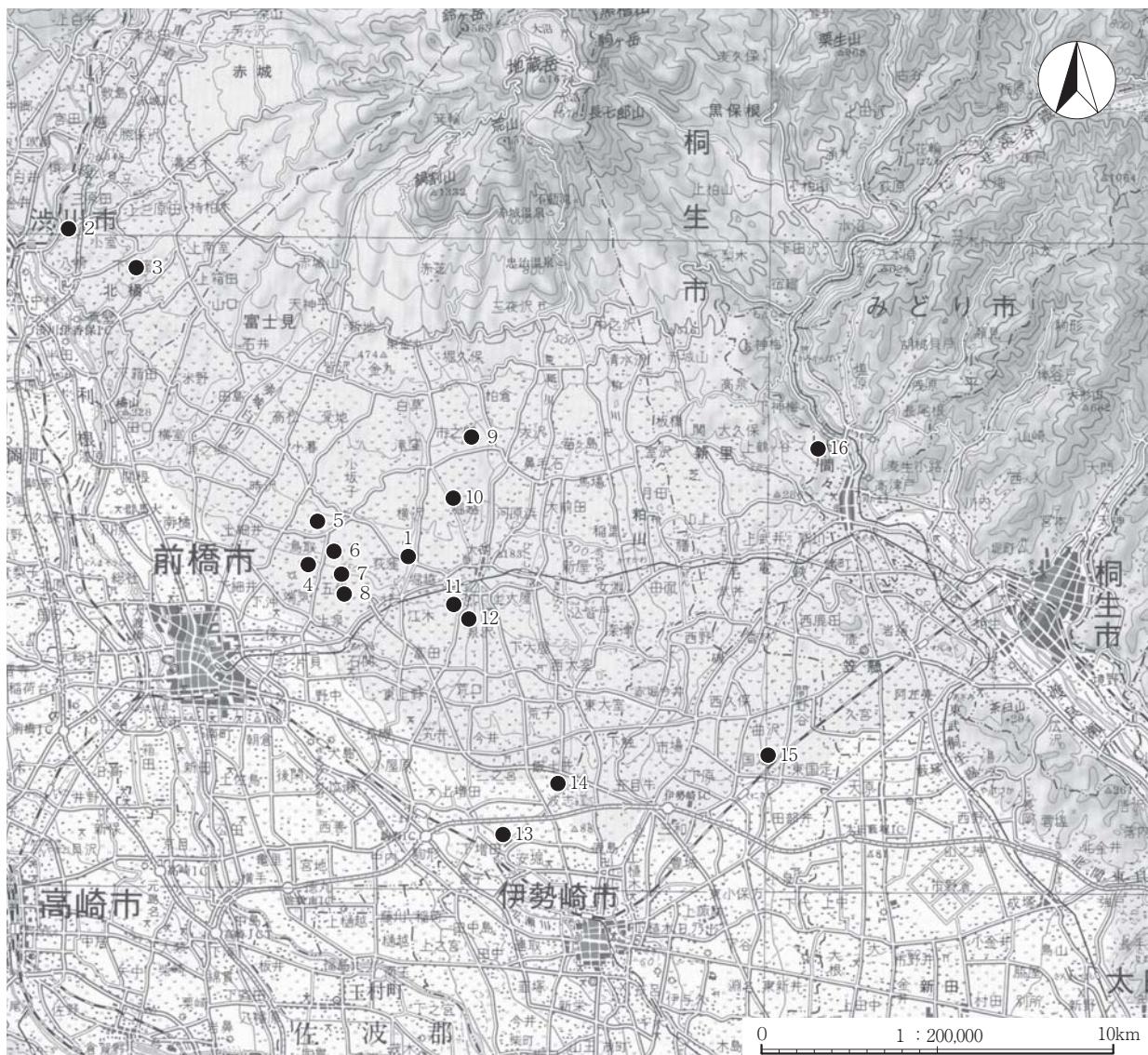


Fig.19 加曽利 E IV期における赤城山西南麓の柄鏡形敷石住居跡

のと考えたい。もちろん④の穴の上には敷石が乗り、⑤の位置には敷石がない。構築順については、ほとんどの柄鏡形敷石住居跡と同様であるが、⑦の造作の内容はわかっていない。本遺跡の還礫は、主柱間を六角形につなぎた縁石の外側に流れ込んだように堆積していて、石棒や石皿の上に乗っていた。環礫の類例は三原田遺跡に3例、小室遺跡、芳賀東部団地遺跡、荒砥二之堰遺跡でみられ後期に増大する。石棒は、三原田遺跡、小室遺跡、芳賀東部団地遺跡、市之関前田遺跡、西小路遺跡、荒砥前原遺跡で出土していて、祭祀的様相を感じさせる。

Tab. 6 加曽利 E IV期における赤城山西南麓の柄鏡形敷石住居跡（16 遺跡 43 例）

No	遺跡名 所在地	立地 標高	繩文住居跡数 E IV期・敷石数	遺構名	形状 規模 (m)	敷石	張出 還礫	炉 (cm)	埋設土器	主柱 対ピット	備考	文献
1	横沢柴崎遺跡 前橋市 横沢町	緩傾斜台上地上 171 m	集落：全2 E IV：1、敷石：1	J - 1号	六角形 5.5 × 3.6	全面敷 間詰め	中央椎石 縁石外側	石円 75 炉石破砕	連結・先端部	各角 ピット連結	石棒	本書
2	三原田遺跡 渋川市 赤城町	丘陵台地上 283 m	集落：全341 E IV：25、敷石：47	1 - 36	-	散在	-	(石圓 50)	連結部 石蓋付	不明 不明		92、97
				1 - 45	円形? 4.8 × 2.9	環状敷	部分敷 縁石外側	-	連結部	環状 不明		
				1 - 56	-	散在	-	(石圓)	連結部	-		
				1 - 57	不明 (5.3 × 3.6)	散在	全敷 縁石	石圓 80	-	-		
				1 - 85	-	散在	椎石? 縁石外側	石圓 80 炉石破砕	連結部	-		
				2 - 10	六角形 (7.5 × 4.2)	壁部分敷	全敷・椎石 張出縁石	石圓 80	連結・柄中部	-		
				2 - 12	-	散在	-	石圓 70	-	-		
				2 - 19	六角形 5.1 × 3.4	ほぼ全面敷 間詰め	散在	石圓 80 炉石破砕	連結部	各角 片側		
				2 - 35	-	散在	-	(石圓 80)	炉隣接	-		
				3 - 1	六角形 (3.9 × 3.3)	壁部分敷	散在	石圓 60 炉体土器	連結部	各角 不明	大珠	
				3 - 34	-	散在	-	石圓 90 炉石破砕	連結部	-		
				4 - 6	円形? 6.2 × 4.3	環状敷	部分敷 縁石外側	石圓 90 炉石破砕	連結・先端部 連結部石組	環状 ピット連結	石棒	
				5 - 19	-	壁部分敷	-	石圓 90 炉体土器	連結部	不明 ピット連結		
				6 - 1	円形?	炉周部敷	-	(石圓 70)	-	環状 不明		
				6 - 46	-	散在	-	石圓 55 炉石破砕	連結部石組	-		
				7 - 29	-	散在	-	(石圓 75)	連結部	環状 不明		
				7 - 36	-	散在	-	石圓 60	連結・先端部	不明 2本		
				7 - R 4	(6.1 × 3.2)	炉周部敷	先端椎石	石圓 55	連結・先端部	-		
3	小室遺跡 渋川市 北橘町	緩傾斜台上地上 320 m	集落：全2 E IV：1、敷石：1	1号	八角形 5.8 × 3.1	全面敷 丁寧	段差・椎石 縁石外側	石圓 75	連結部	各角 2本	石棒	89
4	小神明遺跡 前橋市 小神明町	緩傾斜台上地上 142 m	集落：全5 E IV：2、敷石：2	不明	-	炉周部敷	全敷	石圓 70	-	角? 不明		90、93
5	芳賀北曲輪遺跡 前橋市 勝沢町	緩傾斜台上地上 179 m	集落：全25 E IV：1、敷石：5	J H 22号	楕円形? (4.0 × 3.4)	壁周部敷	散在 縁石	石圓 60	連結部	-		
6	芳賀東部団地遺跡 前橋市 鳥取町	緩傾斜台上地上 153 m	集落：全60 E IV：3、敷石：6	J - 6号	六角形 6.5 × 3.5	ほぼ全面敷 間詰め	散在 縁石外側	石圓 75 炉石破砕	-	各角 2-4	石棒	13
				J - 11号	円形? (4.7 × 4.1)	散在	柱穴間	石圓 90	-	環状 2本	石棒	
				J - 13号	六角形 5.4 × 3.5	環状敷	先端椎石 縁石外側	攪乱	連結部	各角 2-2	石棒	
7	五代山街道1遺跡 前橋市 五代町	台地端部 139 m	集落：全9 E IV：5、敷石：1	J - 6号	円形? (2.7 × 2.4)	炉周部敷	-	石圓 75	炉隣接	環状 2-2		56
8	五代木福II遺跡 前橋市 五代町	舌状台地上 132 m	単独 E IV：1、敷石：1	配石 遺構	不明 (2.8 × 2.1)	炉周部敷 間詰め	-	石圓 50	-	-	立石	44
9	市之関前田遺跡 前橋市 市之関町	舌状台地上 287 m	集落：全24 E IV：13、敷石：5	13号	円形? (2.5 × 2.6)	炉周部敷 間詰め	-	小石圓 60	-	環状 不明		98
				33号	六角形 (4.7 × 3.5)	ほぼ全面敷	連結椎石	石圓 70 炉石破砕	連結部	-		
				35号	不明 (4.7 × 2.0)	炉周部敷	部分敷	石圓 50	連結部石組	菱形? 不明	石棒	
				36号	円形? 5.8 × 3.2	炉周部敷	全敷 縁石	石圓 60	連結・先端部	環状 2-2		
				38号	円形? (3.4 × 2.7)	散在	-	石圓 60 炉石破砕	-	環状 不明	石棒	
10	堀越並木遺跡 前橋市 堀越町	台地端部 217 m	集落：全30 E IV：8、敷石：2	J 1 H	六角形 (2.7 × 2.4)	壁部分敷	縁石	-	先端部	各角 2		57
				J 2 H	六角形 (2.8 × 2.6)	炉周部敷	縁石上側	-	-	-		
11	西小路遺跡 前橋市 茂木町	舌状台地上 139 m	集落：全12 E IV：3、敷石：2	6号	楕円形 (6.3 × 3.7)	炉～壁敷	先端椎石	石圓 85	連結部	-	石棒	19
				7号	楕円形 (6.4 × 4.5)	壁部分敷 小砾	部分敷 縁石	石圓 100	連結・先端部	-		
12	山ノ上遺跡 前橋市 茂木町	台地端部 140 m	集落：全55 E IV：3、敷石：1	15号	不明 (2.2 × 1.6)	炉周部敷	-	石圓 70	-	-		17
13	荒砥前原遺跡 前橋市 二之呂町	台地端部 73 m	集落：全14 E IV：2、敷石：2	C区3号	六角形 (4.7 × 3.3)	ほぼ全面敷	全面敷	石圓 75 炉石破砕	連結部	各角 不明	石棒	94
				2T1号	不明 (3.2 × 3.2)	炉周部敷	-	石圓 70 炉石破砕	-	-	立石	
14	荒砥二之堰遺跡 前橋市 飯土井町	緩傾斜台上地上 91 m	集落：35 E IV：3、敷石：10	26号	円形? (5.2 × 4.1)	壁部分敷	散在 縁石外側	石圓 65	-	環状 ピット連結		95
15	曲沢遺跡 伊勢崎市 曲沢町	緩傾斜台上地上 111 m	集落： (120) E IV：2、敷石：14?	26号	円形? 不明	-	-	石圓 55	-	-		91
16	瀬戸ヶ原遺跡 みどり市 大間々町	台地端部 333 m	集落：全7 E IV：4、敷石：1	J - 6号	六角形 6.5 × 4.1	壁部分敷	部分・段低 縁石	石圓 50	連結部	各角 2		99

## 参考文献

- 1 群馬県古城跡の研究 群馬県文化事業振興会 1971
- 2 大胡町誌 大胡町 1976
- 3 天神風呂遺跡 大胡町教育委員会 1981
- 4 檜峯遺跡 前橋市教育委員会 1982
- 5 殿町遺跡 大胡町教育委員会 1983
- 6 芳賀東部団地遺跡I（古墳～平安1） 前橋市教育委員会 1984
- 7 昭和60年度荒砥北部地区遺跡群（山崎・寺前遺跡） 群馬県教育委員会 1986
- 8 甲諫訪遺跡発掘調査報告書I 大胡町教育委員会 1987
- 9 群馬県史資料編1 群馬県 1988
- 10 芳賀東部団地遺跡II（古墳～平安2） 前橋市教育委員会 1988
- 11 群馬県の中世城館跡 群馬県教育委員会 1989
- 12 天神遺跡 大胡町教育委員会 1989
- 13 芳賀東部団地遺跡III（網文・中近世） 前橋市教育委員会 1990
- 14 萱野・下田中・矢場遺跡 群馬県企業局 1991
- 15 今城遺跡 前橋市教育委員会 1991
- 16 沼西I・沼西II遺跡 前橋市教育委員会 1992
- 17 上ノ山遺跡 大胡町教育委員会 1992
- 18 小林・山神・大畑遺跡 大胡町教育委員会 1992
- 19 西小路遺跡 大胡町教育委員会 1994
- 20 乙西尾引・西天神・柴崎遺跡 大胡町教育委員会 1994
- 21 稲荷前遺跡 大胡町教育委員会 1996
- 22 新畑C地点遺跡 大胡町教育委員会 1996
- 23 稲荷窪A地点遺跡 大胡町教育委員会 1996
- 24 堀越柴山遺跡（堀越丙ニ本松遺跡） 大胡町教育委員会 1996
- 25 小坂子油田I・II遺跡 前橋市埋文発掘調査団 1997
- 26 横沢新屋敷遺跡 大胡町教育委員会 1997
- 27 堀越中道遺跡 大胡町教育委員会 1997
- 28 芳賀東部工業団地遺跡群 前橋市教育委員会 1998
- 29 芳賀東部団地遺跡 前橋市埋文発掘調査団 1998
- 30 五代檜峯II遺跡 前橋市埋文発掘調査団 1998
- 31 上泉太郎三前遺跡 前橋市埋文発掘調査団 1998
- 32 川白田遺跡 川白田遺跡調査会 1998
- 33 堀越西一丁田・堀越乙関替戸遺跡 大胡町教育委員会 1998
- 34 横沢向田・堀越丁二本松・横沢向山・茂木二本松遺跡 大胡町教育委員会 1998
- 35 稲荷窪B地点遺跡 大胡町教育委員会 1998
- 36 上大屋下組・上大屋中組・上大屋天王山遺跡 大胡町教育委員会 1999
- 37 ローズタウン遺跡群堤沼下遺跡 前橋市埋文発掘調査団 1999
- 38 ローズタウン遺跡群富田下大日I遺跡 前橋市埋文発掘調査団 2000
- 39 ローズタウン遺跡群富田下大日II遺跡 前橋市埋文発掘調査団 2000
- 40 ローズタウン遺跡群富田下大日III遺跡 前橋市埋文発掘調査団 2001
- 41 ローズタウン遺跡群富田下大日IV遺跡 前橋市埋文発掘調査団 2001
- 42 萩塙鰐塚・萩塙東爪遺跡 前橋市埋文発掘調査団 2001
- 43 五代竹花・五代木福I・五代伊勢宮I遺跡 前橋市埋文発掘調査団 2001
- 44 五代木福II・五代深堀I遺跡 前橋市埋文発掘調査団 2001
- 45 茂木山神II遺跡 大胡町教育委員会 2001
- 46 横沢向山B地点遺跡 大胡町教育委員会 2001
- 47 萩塙倉兼・萩塙倉兼II遺跡 前橋市埋文発掘調査団 2002
- 48 堤沼西III遺跡 前橋市埋文発掘調査団 2002
- 49 五代伊勢宮II遺跡 前橋市埋文発掘調査団 2002
- 50 五代伊勢宮III・五代中原I・五代伊勢宮IV遺跡 前橋市埋文発掘調査団 2002
- 51 横沢芳山遺跡・横沢大塚跡 大胡町教育委員会 2002
- 52 堀越丁二本松B地点・大胡神社前・養林寺裏遺跡 大胡町教育委員会 2002
- 53 五代伊勢宮V遺跡 前橋市埋文発掘調査団 2003
- 54 五代伊勢宮VI・五代中原II遺跡 前橋市埋文発掘調査団 2003
- 55 五代竹花II・五代木福III遺跡 前橋市埋文発掘調査団 2003
- 56 五代中原III・五代山街道I・五代山街道II遺跡 前橋市埋文発掘調査団 2003
- 57 堀越並木A・C地点遺跡 大胡町教育委員会 2004
- 58 五代木福IV・五代深堀III遺跡 前橋市埋文発掘調査団 2005
- 59 芳賀東部団地遺跡III 前橋市埋文発掘調査団 2005
- 60 小坂子一本峯遺跡 前橋市埋文発掘調査団 2005
- 61 富田漆田・富田下大日遺跡 群馬県埋文調査事業団 2006
- 62 江木下大日遺跡 群馬県埋文調査事業団 2006
- 63 小坂子一本峯遺跡II 前橋市埋文発掘調査団 2006
- 64 堀越並木D地点・堀越丙諫訪遺跡 前橋市埋文発掘調査団 2006
- 65 堀越甲真木遺跡 前橋市埋文発掘調査団 2006
- 66 天神風呂遺跡群 前橋市埋文発掘調査団 2006
- 67 萱野II遺跡 群馬県埋文調査事業団 2007
- 68 横沢五反田遺跡 前橋市埋文発掘調査団 2007
- 69 石闕西田遺跡III 前橋市埋文発掘調査団 2007
- 70 五代伊勢宮遺跡（1） 前橋市埋文発掘調査団 2007
- 71 提沼上遺跡 群馬県埋文調査事業団 2008
- 72 亀泉坂上遺跡 群馬県埋文調査事業団 2008
- 73 亀泉西久保II・荻窪南田遺跡 群馬県埋文調査事業団 2008
- 74 上武道路・旧石器時代遺跡群（1） 群馬県埋文調査事業団 2008
- 75 五代伊勢宮遺跡（2） 前橋市埋文発掘調査団 2009
- 76 上武道路・旧石器時代遺跡群（2） 群馬県埋文調査事業団 2010
- 77 上泉唐ノ堀遺跡 群馬県埋文調査事業団 2011
- 78 上泉唐ノ堀・上泉新田塚遺跡群 群馬県埋文調査事業団 2011
- 79 上泉武田遺跡 群馬県埋文調査事業団 2012
- 80 五代砂留遺跡群 群馬県埋文調査事業団 2012
- 81 上武道路・旧石器時代遺跡群（3） 群馬県埋文調査事業団 2012
- 82 五代深堀I遺跡No.2 前橋市教育委員会 2015
- 83 史跡女堀 前橋市教育委員会 2016
- 84 群馬県古墳縦縁 群馬県教育委員会 2017
- 85 五代伊勢宮VII・VIII遺跡 前橋市教育委員会 2018
- 86 堀越甲真木B遺跡 前橋市教育委員会 2018
- 87 天神風呂遺跡M地点 前橋市教育委員会 2019
- 88 天神風呂遺跡N地点 前橋市教育委員会 2020
- 89 小室遺跡 北橘村教育委員会 1968
- 90 前橋市史第1巻 前橋市 1973
- 91 曲沢遺跡調査概報1・2 赤堀村教育委員会 1979
- 92 三原田遺跡I 群馬県企業局 1980
- 93 小神明遺跡群 前橋市教育委員会 1982
- 94 荒砥前原遺跡 群馬県埋文調査事業団 1985
- 95 荒砥二之塙遺跡 群馬県埋文調査事業団 1985
- 96 芳賀北曲輪遺跡 前橋市埋文発掘調査団 1990
- 97 三原田遺跡3 群馬県企業局 1992
- 98 市之闇前田遺跡III 宮城村教育委員会 1992
- 99 潛戸ヶ原遺跡（A区） 大間々町教育委員会 1999
- 100 三ッ字沢中遺跡 群馬県埋文調査事業団 2000
- 101 溝呂木大御堂遺跡 赤城村教育委員会 2003
- 102 堤遺跡 群馬県埋文調査事業団 2013
- 103 史跡 水上石器時代住居跡 みなかみ町教育委員会 2016
- 104 糸井大夫遺跡II 昭和村教育委員会 2018



J - 2号住居跡 全景（北から）



J - 2号住居跡 炉（南から）



J - 2号住居跡 炉体土器（東から）



集石遺構（東から）



W - 2号溝、D - 6～8土坑（東から）



D - 1号土坑 全景（西から）



D - 6号土坑 全景（南西から）



D - 9号土坑 全景（南から）

PL.2



D-10号土坑 全景 (南東から)



D-11号土坑 全景 (北西から)



W-1号溝 全景 (北から)



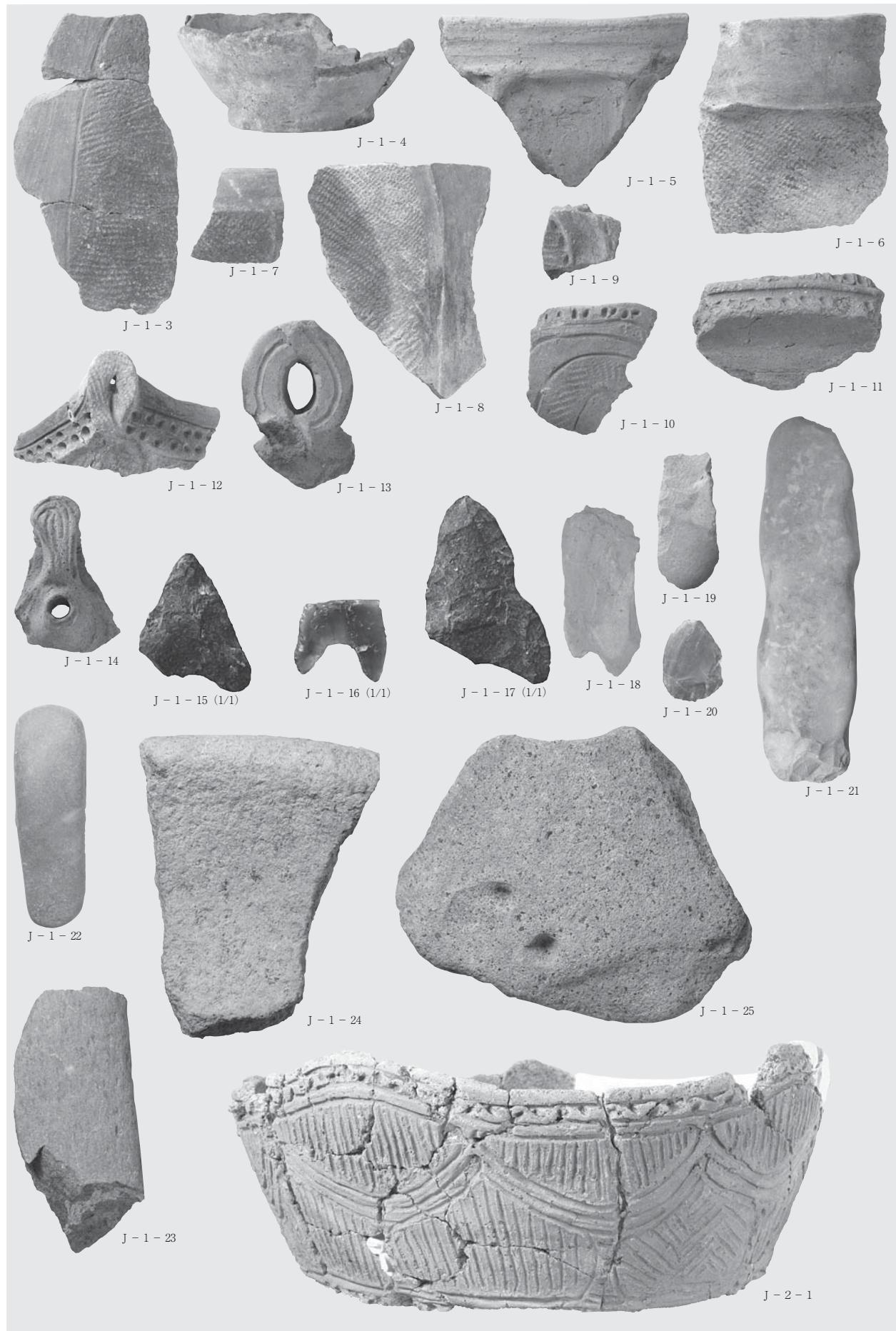
包含層調査風景 (南から)



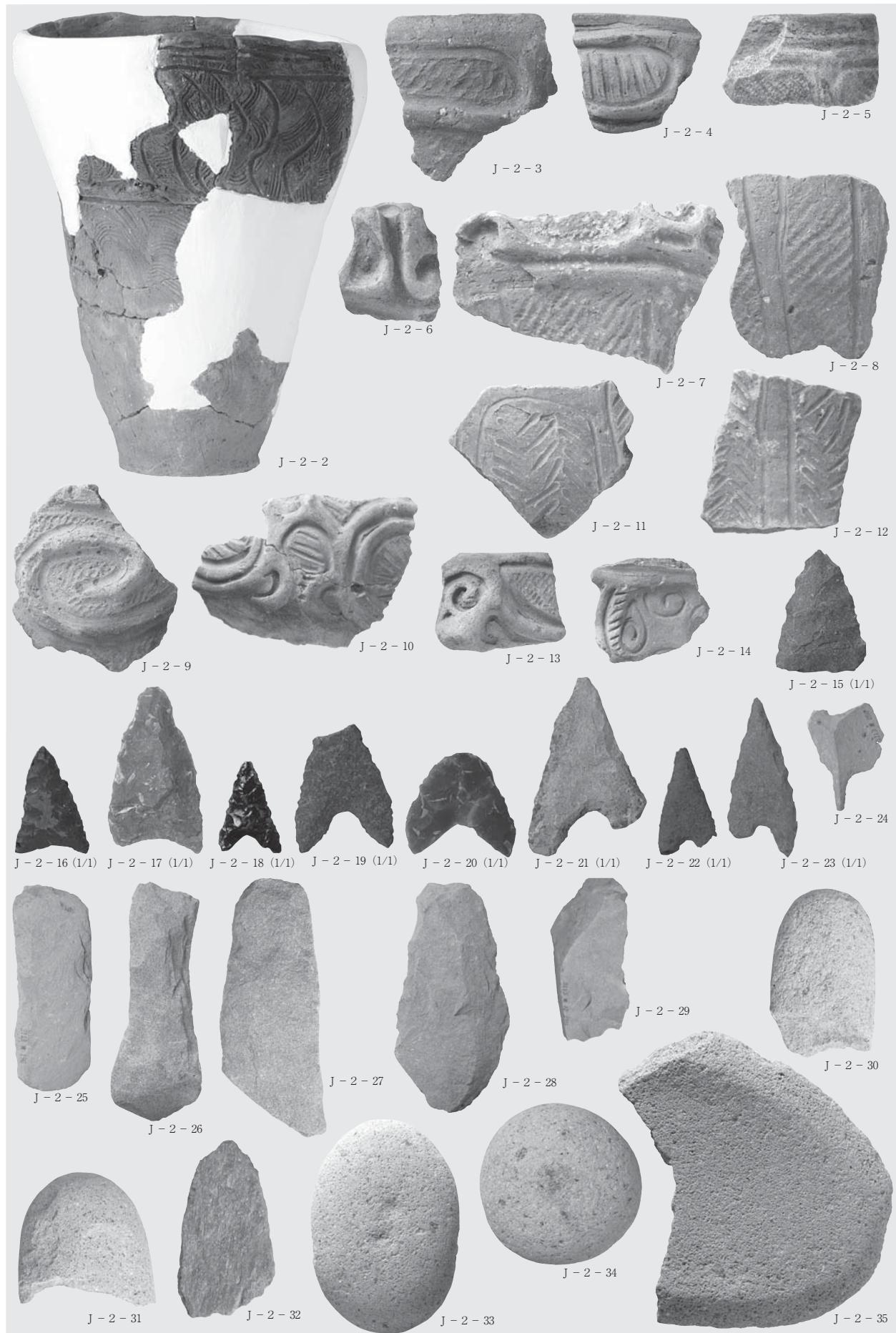
旧石器 - 1 (1/1)

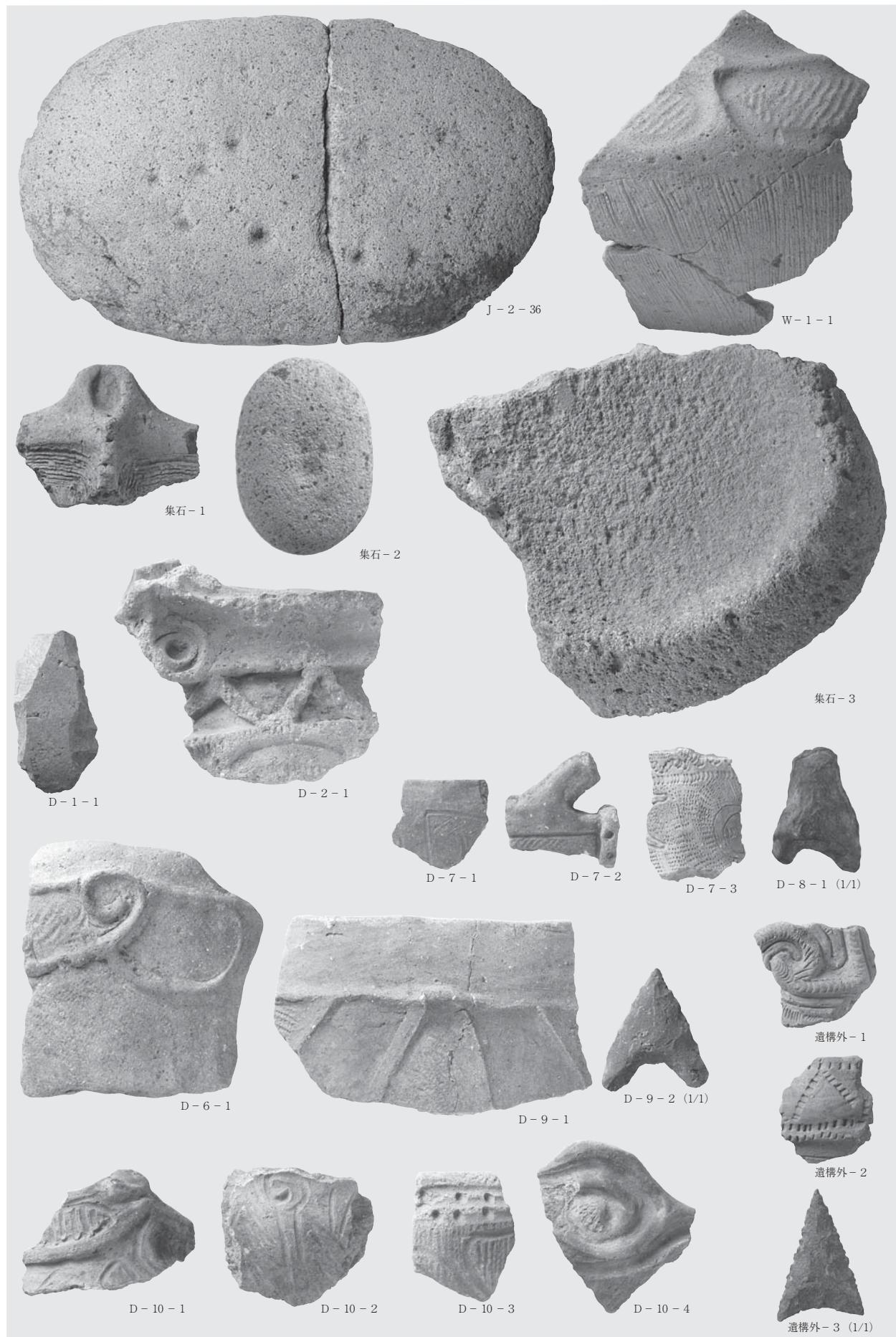
J - 1 - 2

J - 1 - 1



**PL.4**





## 報告書抄録

カタカナ	ヨコサワシバサキイセキ
書名	横沢柴崎遺跡
副書名	店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	-
シリーズ名	-
シリーズ番号	-
編著者名	並木史一・三宅敦氣・松村春樹
編集機関	技研コンサル株式会社
編集機関所在地	〒371-0033 群馬県前橋市国領町2丁目21番地12
発行機関	前橋市教育委員会
発行機関所在地	〒371-0853 群馬県前橋市総社町3丁目11番地4
発行年月日	2022年6月30日

フリガナ	フリガナ	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
ヨコサワシバサキイセキ 横沢柴崎遺跡	マエバシヨコサワマチ 前橋市横沢町32番	102016	3II3	36°24'51"	139°8'28"	20220301 ～ 20220325	152m <sup>2</sup>	店舗建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
横沢柴崎遺跡	集落 遺物包含層	縄文時代 中～後期	敷石住居跡 竪穴住居跡 土坑 集石遺構 溝 ピット	1軒 1軒 10基 1基 2条 6基	細石刃核 縄文土器 石器	縄文時代中期後半の集落。 加曾利EⅢ期の大型竪穴住居跡。 加曾利EⅣ期の柄鏡形敷石住居跡。

## 横沢柴崎遺跡

店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2022年6月17日 印刷  
2022年6月30日 発行

発行 前橋市教育委員会事務局文化財保護課

〒371-0853 群馬県前橋市総社町3丁目11番地4  
TEL 027-280-6511

編集 技研コンサル株式会社  
印刷 朝日印刷工業株式会社







